



TITLE:

京都大学結核胸部疾患研究所年報 (昭和 51 年度)

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学結核胸部疾患研究所年報(昭和 51 年度). 京都大学結核胸部疾患研究所紀要 1977, 10(1/2)

ISSUE DATE:

1977-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52207>

RIGHT:

京 都 大 学

結核胸部疾患研究所年報

昭 和 5 1 年 度

(1 9 7 7 年 3 月)

京都大学結核胸部疾患研究所

京 都 大 学

結 核 胸 部 疾 患 研 究 所 年 報

昭 和 5 1 年 度

(1 9 7 6 年)

京都大学結核胸部疾患研究所職員及準職員

(昭和52年3月1日現在)

所 長 教 授 前 川 暢 夫

(内科学第一部門)

主任教授：前川暢夫，助教授：中西通泰，講師：川合 満，助手：久世文幸，小田芳郎，江部康二，西山秀樹，講師(非常勤)：吉田敏郎，池田宣昭，今井節郎，角田沖介，中井 準，吉見輝也，松原恒雄，技能補佐員：細木春世

(内科学第二部門)

主任教授：大島駿作，助教授：小原幸信，講師：泉 孝英，助手：木野稔也，佐藤篤彦，大山口渥，門 政男・講師(非常勤)：日置辰一朗，太田 鋤，中島道郎，浅田高明，福岡謙助，杉本幾久雄，小松幹雄，技能補佐員：吉川愛子

(胸部外科学部門)

主任教授：寺松 孝，助教授：山本博昭，講師：伊藤元彦，助手：清水慶彦，松本守海，長瀬千秋，講師(非常勤)：中村 健，立石昭三，池田貞雄，北野司久，倉田昌彦，吉柄正之，秋山文彌，岡田慶夫，生島宏彦，外村聖一，伊東政敏，小林君実，人見滋樹，技能補佐員：古川多宏

(病理学部門)

主任教授：安平公夫，助教授：竹田俊男，助手：高橋権也，鈴木康弘，講師(非常勤)：水島 裕，野本亀久雄，小川雄之亮，浜岡利之，熊沢義雄，山室隆夫，森川茂，技官：松下隆壽，技能補佐員：小池久美子，奥村由美子

(細菌血清学部門)

主任教授：上坂一郎，助手：桂 義元，竹尾漢治，講師(非常勤)：小林 博，大平 実，技能補佐員：高沖悠子，東 傳一

(細胞化学部門)

主任教授：市川康夫，助教授：大川欣一，助手：平井圭一，講師(非常勤)：井上 嘉，水谷民雄，引間啓介，菅井尚則，小島清秀，技官：竹内道子，事務補佐員：木下美香

(臨床肺生理学部門)

主任教授：佐川弥之助，助教授：加藤幹夫，講師：浅井信明，助手：加藤弘文，講師(非常勤)：大橋啓吾，土肥佳郎，稲葉宣雄，安田隆三郎，真鍋 貴，久野健志，室本 仁，市谷迪雄，甲斐隆義，石部裕一，仲田 祐，田

苗英次, 折田雄一, 山林 一, 技能補佐員: 服部央子, 宮本嘉子

(事務部)

事務長: 中村七郎, 事務長補佐: 本間彰雄, 庶務掛長: 佐藤昭治, 同主任: 近藤英子, 同事務官: 室谷弘美, 小林 収, 堀田良恵, 多田恭子, 同技官: 田中 稔, 川原田和夫, 事務補佐員: 日下部照子, 経理掛長: 長永 進, 同主任: 佐藤良雄, 同事務官: 野元頼子, 奥村成昭, 前野正世, 田中義郎, 事務補佐員: 中瀬安子, 小倉恵美子, 収入掛長: 宇野定夫, 同主任: 畠中秀雄, 同事務官: 野田芳子, 佐竹セツ, 藤井芳克, 山本正幸, 事務補佐員: 中村房枝, 竹内孝子, 集治昌代, 患者掛長: 氏江 実, 同主任: 室恵美子, 事務補佐員: 賀屋俊子, 水田明子, 足立容子, 山田啓子, 管理掛長: 田中信雄, 同事務官: 前田久男, 同技官: 進士 悟, 西川景曠, 岩井昭一, 松浦 康, 小西喜一郎, 同事務官: 高安忠一, 橋本敏子, 水原貞子, 蔭山一十四, 渡辺光子

(動物飼育室)

技官: 飛田 勇, 門田一美, 大字雪雄, 安岡倉一, 技能員: 近藤照子

(附属病院)

病院長(兼) 教授: 寺松 孝

(第一内科診療科)

科 長(兼) 教授: 前川暢夫

外来医長(兼) 講師: 川合 満

病棟医長(兼) 助教授: 中西通泰

医員: 徐航霄, 沢田賢三, 医員(研修医): 網谷良一, 加藤達治, 細川昌則, 坂東憲司, 望月吉郎, 長谷光雄

(第二内科診療科)

科 長(兼) 教授: 大島駿作

外来医長(兼) 講師: 泉 孝英

病棟医長(兼) 助教授: 小原幸信

医員: 今井弘行, 西川伸一, 平田健雄, 川西康夫, 本田和徳, 医員(研修医): 北市正則, 湊 長博, 満安清孝

(外科診療科)

科 長(兼) 教授: 寺松 孝

外来医長(兼) 助教授: 山本博昭

病棟医長(兼) 講師: 伊藤元彦

医員: 馬場満男, 滝 俊彦, 太田和夫, 佐藤公彦, 医員(研修医): 高嶋義光, 李 泰興, 松延政一, 青木 稔, 宮本好博, 浅田浩之, 山中 晃

(放射線科診療部)

科 長(兼) 教授: 佐川弥之助

外来医長(兼) 講師: 浅井信明, 講師(非常勤): 阿部光幸

医員: 山田久和, 大岡 剛

(検査部)

検査部主任(兼) 助教授: 加藤幹夫, 技師長: 木津 啓, 技官: 山岸悦子, 平井 要, 西尾貞子, 和田ひな, 本間トキエ, 今井保代, 増田 稔, 山根すま子, 前田清子, 事務官: 清水一枝, 技術補佐員: 中迫由美子

(放射線部)

放射線部主任(兼) 助教授: 中西通泰, 技師長: 浜川純一, 撮影主任: 蔵岡信良, 技官: 大坂泰夫, 曾我部康之, 灘井智代子, 田中龍蔵, 技能補佐員: 十一家忍

(薬剤部)

薬剤部長: 桑田 宏, 薬剤主任: 澤岡平和, 技官: 藤原壽子, 川田昌子, 小林千代子, 事務官: 宇野初枝, 関保子, 薬剤師: 川勝一雄

(看護部)

総看護婦長: 細川ミツエ, 看護婦長: 中根文子, 大前久野, 松田比佐子, 岡崎明子, 副看護婦長: 小林とよ, 斎

藤千鶴子, 近藤信子, 技官: 古府静江, 岩永千代子, 高市政子, 安部克己, 松本敏枝, 講殿保子, 田中松代子, 小林梅野, 松田富子, 明石和子, 小林富貴子, 小川まゆみ, 米山須磨子, 阿部喜代子, 柴田佐代子, 秋田宏子, 桜井桂子, 大山峰子, 岩佐純子, 末田恵子, 原 純子, 田中正子, 稲田ひろ子, 城山博子, 山中祥子, 古塚広子, 小泉カスミ, 楠喜久子, 井藤泰子, 森 幸子, 斎藤節子, 稲垣美智子, 松田初枝, 二宮トミ子, 村西直美, 久野代子, 衛藤泰子, 内藤敏子, 濃野ヒロ子, 小嶋陽子, 平畑早苗, 多田潤子, 町 和美, 上里幸子, 宮城登代子, 広川一枝, 能井美千代, 森 朝子, 片桐久江, 内木カネ子, 松本不二, 技能員: 原田芳香

教 官 人 事

細 胞 化 学 市 川 康 夫 教 授

昭和50年4月1日付停年退官の細胞化学部門主任, 高松英雄教授の後任として結核胸部疾患研究所教授会は結核胸部疾患研究所教授候補者選考内規(以下 内規という)に基づき, 以下に示すごとき経過を経て, 昭和51年1月29日, 京都大学ウィルス研究所助教授, 市川康夫氏を選考決定した(昭和51年4月1日発令)。

1. 経 過

内規第2条第1項により細胞化学門主任教授候補者の選考が所長の召集する全教官の集まりに附議した上, 内規第3条に従って選考の方針について討議を行ない, 専攻分野については「細胞化学及びその周辺領域」とされた。

引続き, 内規第3条及び第4条により 選考委員会が成立し, 全教官の集いにおける選考方針に則って, 結核胸部疾患研究所の常勤教官並びに全国医科系の学部, 研究所に対して公募する旨の値書を昭和49年12月24日付で発送し, 締切りは昭和50年1月31日とした。

2月上旬以降, 応募者, 推薦のあった者, 並びにその後, 選考委員会として選考の範囲に加えた者について, 精力的な審議を昭和51年1月上旬まで行なった。同年1月29日内規第7条に従って, 選考委員会は狭義の細胞化学の分野から2名, その周辺領域の分野から2名, 合計4名の候補者を選出し, 資料を添えて教授会に提出した。教授会は内規第8条により慎重審議を行なった上で, 投票を行ない, その結果, 京都大学ウィルス研究所助教授, 市川康夫氏に決定を見たものである。

2. 市川康夫氏(昭和2年9月4日生)の略歴

(1) 学 歴

| | |
|---------|---------------------|
| 昭和27年3月 | 京都大学医学部医学科卒業 |
| 28年3月 | 神戸市甲南病院における実地修練終了 |
| 28年7月 | 医師免許証(医籍登録第148755号) |
| 35年3月 | 医学博士(京都大学)の学位を授与さる。 |

(2) 職 歴

| | |
|---------|--------------------------------|
| 昭和28年7月 | 京都大学医学部附属病院小児科 永井教授指導の下にて研究に従事 |
| 28年9月 | 医学部附属病院副手 |
| 29年5月 | 市立長浜病院小児科医員 |
| 31年3月 | 京都大学医学部病理学教室 天野助教授指導の下にて研究に従事 |
| 32年6月 | 京都大学助手(ウィルス研究所) |
| 37年9月 | 京都大学助教授(ウィルス研究所) |
| 40年7月 | イスラエル国 Sachs 教授の下で研究に従事 |
| 42年8月 | 帰学。 現在に至る。 |

3. 研究業績の概要

市川氏の基礎医学面での研究は昭和31年京大病理学教室、続いて翌年ウィルス研究所において天野教授の下で始められた。以後、白血病ウィルスに関して見事な業績を挙げ、その多くがウィルス研究所英文紀要の他 Gann, Acta Path. Japon., 日本血液学会誌等に掲載され、その名は白血病ウィルス学者として確立された。第16回日本医学会総会にはシンポジウム講演者の1人に選ばれて「SL マウス白血病ウィルスの研究」と題する講演を行なった。

同氏の研究はその後、イスラエルに留学、Sachs 教授との協同研究を行ない、白血病細胞の分化へとスケールの大きい仕事に方向を変えてきた。

その研究成果は Proc. Nat. Acad. Sci., J. Cell Physiol., Exp. Cell Res., Gann およびその Monograph に収録され国際的評価を博した。この方面の業績は日本血液学会総会の宿題報告「In vitro での血球の増殖と分化」として、更にまた昭和50年には「骨髓性白血病細胞の分化」に関する研究に対して高松宮妃癌研究基金学術賞を受賞、多大の反響をよんだ。以上の研究の進展に伴ない、同氏は細胞培養の上清中に白血病細胞の増殖を促進する因子（増殖因子）および細胞の形態、機能の分化を招来する因子（分化因子）を証明、最近ではその分離と精製に努め、更にその作用機序の解明に及ぼうとしている如くである。

細胞の癌化、また逆に癌細胞の脱癌化等、の現象にとりまいている市川氏のスケールの大きな仕事には今後、大きな発展が期待されている。（上坂一郎）

内 科 学 第 一 江 部 康 二 助 手

昭和49年3月京大医学部卒、同年7月1日より医員（研修医）として臨床研修を行なった。その間、特に放射線医学教室に出向いて同教室での諸種の技術について研修し、それを胸部疾患の診断及び治療に導入して成果をあげてある。昭和51年4月1日助手に任命されたものであるが、人柄は温厚で、考え方は非常に弾力的であり新しいタイプの呼吸器科医を目指しているようである。熱心な診療活動のなかから幾つかの臨床研究の萌芽が見出されているので、将来の成果を期待している。（前川暢夫）

内 科 学 第 一 西 山 秀 樹 助 手

広島修道高校を経て昭和48年9月京大医学部卒、同年10月より京大医学部内科学教室で白血病の化学療法に関する研究に従事していたが、昭和49年7月より京都大学医学部附属病院の医員（研修医）となり臨床研修を開始した。その後、昭和51年7月からは当研究所附属病院の医員として勤務していたが、同年11月16日助手に任命されたものである。人柄は円満で、熱意に溢れ、胸部疾患の臨床のかたわら感染症の化学療法、殊に宿主の条件が低下している場合の化学療法効果の研究の緒が開いているようである。今後を大いに期待している。（前川暢夫）

放 射 線 科 浅 井 信 明 講 師

浅井信明君は昭和36年京都府立医科大学を卒業。同学で実地修練の後、当研究所外科に入局、以後、国立宇多野療養所、天理よろず相談所病院に勤務し、西ドイツに留学、ギーセン大学では、とくに血管外科を習得した。帰国後、小倉記念病院胸部心臓血管外科部長として活躍していた。

同君を当研究所附属病院放射線科講師としてむかえた理由は、同君の血管造影に関する研究を高く評価したため、今後、当研究所における胸部疾患、ことに心疾患の血管造影技術の向上を期待している。（佐川弥之助）

胸 部 外 科 加 藤 弘 文 助 手

昭和45年、京大医学部卒、京大にて研修医として、その後、昭和47年より静岡市立静岡病院の胸部外科で、私どもの非常勤講師、秋山部長の指導で昭和51年11月まで、約4年間心臓血管外科の修練を行った。

私どもの許では、臨床的には心臓チームの一員ではあるが、同時に肺臓外科の研修も行い、研究としては人工弁の試作を担当する予定である。

大阪の産、大阪人の土性骨と外科医としての気風の良さとを兼ねている。

当部門の心臓外科は出遅れたこともあって末だみるべき研究業績がない。しかし、次第にこれからよい仕事が出ると期待しており、その第一弾が清水君か加藤君かと考えている。（寺松孝）

学術集会記録

I 昭和50年度学術講演会（昭51.1.31 楽友会館）

1. 遅延型過敏症の抗原からの解析

病理 馬場 満男, 森川 茂

マウスは遅延型過敏症を起し難い動物であるが、カルボキシル基を化学修飾した蛋白抗原であるメチル化人血清アルブミン、メチル化牛血清アルブミン、或はメチル化卵白アルブミンを用いる事により、足蹠反応を指標とした遅延型過敏症を発現しうる。又、自己蛋白であるマウス血清アルブミンも、メチル化により、マウスに遅延型過敏症を発現させる事ができるようになり、メチル化による新しい抗原定基の導入が示唆される。

このメチル化蛋白抗原は、塩基性蛋白であり、血清蛋白、特に α -globulin 領域の蛋白と非特異的に反応し、沈降物を作る。In vitro では、胸腺細胞に対しては毒性を示し、マクロファージに対しては、強く細胞膜と反応し、マクロファージの形態を変化させる刺激性を有する。

卵白アルブミン(OA)のカルボキシル基がメチル化したMOA、グリシンメチルを結合したGMOA、アミノ基をジメチル化したdiMOAを用いて、その化学修飾の差を遅延型過敏症で比較すると、MOA、GMOAの感作では、遅延型過敏症は出現するが、抗体産生は認められず、OA、diMOA感作では、抗体産生能はあるが、遅延型過敏症は発現しない。

MOA或はGMOAで感作されたマウスに、OA、MOA或はGMOAでテストして、その交叉反応性を調べてみると、MOA感作では、OA、MOAで遅延型反応を示すが、GMOAでは反応しない。GMOA感作では、GMOA、MOA、OAの順の強さで遅延型反応を示す。脱感作実験が行い、さらに交叉反応性をみると、GMOA感作マウスは、GMOA、MOAで脱感作されるが、MOA感作マウスは、GMOAでは脱感作されず、MOAのみで脱感作される。即ち、化学修飾された分子の大きさが、遅延型過敏症の交叉反応性に影響していると言えよう。MOA感作マウスで、MOAでテストした場合、MOAでは脱感作されるが、OAでは脱感作されず、OAでテストした場合には、OA、MOAで共に脱感作される事が判明した。この事より、MOA感作マウスには、少くとも二種の抗原決定基に反応するT-細胞があり、その内一つは、nativeなOAに反応するものであり、他は、化学修飾により導入された、新しい抗原決定基に反応するものであると考えられる。

2. 酸性領域でのカタラーゼの細胞化学的研究

細胞化学 大川 欣一

周知の如く、カタラーゼの細胞化学的研究は3,3'-diaminobenzidine (DAB)あるいは2,7-fluorenediamine (2,7-FDA)などの水素供与体を用いてアルカリ性反応液で行われている。しかしながら、ペルオキシダーゼ及びカタラーゼの細胞化学的研究に使用されている水素供与体の化学構造とその反応液の至適pHとの関連性に注目して実験を行った結果、カタラーゼは現在までに報告されているアルカリ領域のみならず、酸性領域においても細胞化学的反応が呈することが明らかにされたので報告する。

実験に供した動物は成熟雄 Wistar 系ラット (体重 200~230 g) の肝及び腎組織である。組織固定は、① 冷燐酸緩衝 (pH 7.2) 2.5% glutaraldehyde (含 6% 蔗糖), ② 冷燐酸緩衝 (pH 7.2) 2.5% glutaraldehyde (含 6% 蔗糖, 5 M formamide) で行った。肝は transparenchymal perfusion を実施した後、腎はそのまま、 $1/\text{mm}^3$ の小組織片として約10時間固定した。固定完了後、冷燐酸緩衝液 (含 6% 蔗糖; pH 7.2) で10~14時間洗滌後凍結切片として使用した。実験に供した水素供与体は DAB 及び 2,5-fluorenediamine (2,5-FDA) であるが、一部では 2,7-FDA も用いた。反応液の pH は 7.2, 6.8, 6.2, 5.6, 5.2, 4.6, 4.0 である。反応液の組成は次の如くである。(1) DAB の場合: DAB 5 mg を 19.8 ml の緩衝液 (pH 7.2, 6.8, 6.2 は tris-maleate buf., pH 5.6 以下では acetate buf.) に溶解した後、3% H_2O_2 0.2 ml が添加。(2) 2,5-FDA の場合: 2,5-FDA 4 mg を DMF 0.5 ml に溶解し、19.3 ml の緩衝液 (DAB の場合と同様) を加え、更に 3% H_2O_2 0.2 ml を添加。2,7-FDA は 2,5-FDA と置換して使用した。

実験の結果は次のようであった。

DAB 反応液: ① 固定液による切片では中性附近ではカタラーゼ反応は殆んどなく、糸粒体染色が強い。反応液の pH が低くなるに従って、カタラーゼ反応が次第に増強し、糸粒体染色が減少。② 固定液による切片では全般にカタラーゼ反応が増強しており、糸粒体染色は強く抑制されている。至適 pH は 5.2。

2,5-FDA 反応液: ① 固定液による切片ではいずれの pH でも糸粒体染色は認められない。カタラーゼ反応は全般に弱いが、pH が低くなると次第に増強する傾向は DAB の場合と同様。② 固定液によるものではカタラーゼ反応は顕著に増強され、至適 pH は 4.6。2,7-FDA は酸性領域では明らかなカタラーゼ反応は与えない。

DAB 及び 2,5-FDA の酸性領域での peroxisomes 染色が同オルガネラのカタラーゼに由来するものであることは 3-amino-1,2,4-triazole (10^{-2}M) による阻害実験で明らかである。

3. 細胞表層の微細構造に関する若干の新知見

細菌血清 竹 尾 漢 治

病原性微生物の大半を含む、細菌及び真菌は、通常の細胞の場合には、最外層にあたる細胞膜の外側に厚い細胞壁を持っており、この細胞壁が、細菌及び真菌の形態を決定している。細胞壁は、これらの微生物が、環境と最初に接する場所として重要である。又、細胞壁化学組成は菌の分類に大きな役割をはたしているが、これは、細胞膜内の構造物が生体にとって、基本的には同一でなければならないのに、細胞壁部分では、多様な変化が可能であることを示している。このことから、私は、多種類の細菌及び真菌の細胞壁表層の微細構造を Freeze-etching 法、Negative staining 法、Shadow casting 法等により調べ得た新知見のうち、本講演会では、Mycobacterium 層及び、それに比較的近縁の Micropolyspora 層を中心にお話した。

病原性の菌は、2.5% グルタルアルデヒド (pH 7.2) で、4°C 一晚固定、殺菌した後、通法通り、電子顕微鏡用試料作成を行った。

結果: 調べた Mycobacterium 15種、25株に云える一般的特長は、本来の細胞壁のさらに外側に、Lipid と思われるものの付着が見られることである。このものは、株によって、不定形、層状、带状 (幅約 100 nm)、線状 (幅約 5 nm)、ひも状 (幅約 10 nm) 等、様々な形態を成した。又、ひも状のものの一部は、線状のものの集合であった。Nocardia の一部の様には、層状のものが一部のものに、線状、又、N. asteroides や N. brasiliensis には、放線菌の孢子表層に存在するのと同様の構造が見られた。Corynebacterium には、このような構造は、ほとんど観察されなかった。Corynebacterium 及び Nocardia の一部、及び、大部分の Mycobacterium の細胞壁は、Band 状の盛り上りを示した。この構造は、今の所、他の菌種には見られていない。恐らく、Lipid の存在によると思われるが、Mycobacterium 及び Nocardia は、Freeze-etching 法によっては、ほとんど、内部構造を露呈しないのが特長であるが、一方、このことの Technical な解決が、両菌種の細胞膜の研究に大きな意味を持つであろう。

Micropolyspora は、アレルギーともなり、又、Farmer's lung の原因菌である。このものは、Mycobacterium に近縁で、真の孢子を、気菌糸、及び栄養菌糸上に産生する。本菌層の、栄養菌糸、及び、その上に産生した孢子の表面には、特別の模様は見られなかったが、気菌糸及び、その上の孢子表面には、複雑な線様模様が見ら

れた。この模様は *M. angiospora* の場合、直径約 2nm のものと 5nm の二種類より成った。さらに大型のものは、小型のもの二本のより合わせらせんであった。このような細胞壁表層構造（模様）は、調べた放線菌に一般的であって、この分類学的、及び生理的意味づけが現在、探求中である。

4. 気管支拡張症の進展

内科学第一 中西 通 泰

(1) 慢性副鼻腔炎について

その発病は普通 3～5 才の頃で、思春期頃までに治癒するか、潜在化するものもあるが、慢性化した成人の副鼻腔炎は難治である。手術をしても完治するものが少なく再発をくり返す。抗生物質による治療の進歩した現在でも、慢性のもの、特に重症のものでは依然として減少の傾向がみられない。

副鼻腔炎での遺伝については既に詳細な研究が数多くあり、家族集積性が証明され、その臨床病型、病変の程度、あるいは前頭洞の発育に濃厚な遺伝性が認められている。

慢性副鼻腔炎と気管支拡張症がよく合併することは周知の事実で、その因果関係については、前者が原因で後者が起るとする所謂下説が主流をなしてきた。然し両者の間に因果関係を考えるよりも、両者ともにある共通した原因、恐らく発生上の異常にもとづく含気腔壁の構造上の欠陥から起ると考える方が、より事実 に 則している。

(2) 前頭洞の X 線的観察

レントゲン写真でみる頭蓋内含気腔、とくに前頭洞の大きさや形態には個人差が著明であるが、この個人差は先天的なもので遺伝が確実に関係するとされている。気管支拡張症 90 例と、対照として拡張症以外の呼吸器疾患及び呼吸器疾患を有せぬもの 500 例の前頭洞を調べた。その結果、前頭洞の欠損するもの、あるいは小さいものは、気管支拡張症患者で明かに多く、また欠損の 24 例中 23 例までが、気管支拡張症、慢性副鼻腔炎、慢性気管支炎のいずれか、あるいはそれらの合併した症例であった。発生異常による奇型の一とされている Kartagener 症候群と肺分画症の各 1 例もこの中に含まれている。

(3) 気管支拡張症の進展

これは気管支造影で新たな拡張が生ずることを意味し、成人期のものでは普通進展はなく、ごく僅かな症例が進展するにすぎないと私は考えている。患者の自覚的、他覚的症状でも少数例に改善がみられるが殆んどが不変であり、悪化するものは僅かである。

気管支の拡張に進展があるかどうかは、手術の適応を決める際に生ず問題になる所である。

ではどのような症例に進展がみられるか、今までに経験した進展の症例 10 例をまとめ、それらに共通した点を見ると次の通りである。

- 1) 拡張そのものが初診時から広汎である。
- 2) 拡張の進行は思春期以后も続く。
- 3) 重症副鼻腔炎の合併が多い。
- 4) 前頭洞の欠損するものが多い。
- 5) 進展のために重症感染症のくり返しを必ずしも必要としない。
- 6) 予後が悪い。10 例中 4 例が死亡している。

以上をまとめると、気管支拡張症の僅かな症例に進展がみられ、そこに先天的な素因の関与がうかがわれる。

5. 昆虫による気管支喘息

内科学第二 木 野 稔 也

我々人は、大きな昆虫環境の中で生活している。あらゆる物質が、気管支喘息のアレルゲンとなりうるのであるから、人の生活と接触の深い蛾や蝶が気管支喘息の原因となりうる事は、十分推察されることがらではあるが、従来蛾や蝶による気管支喘息は少ないものと考えられていた。この原因は、診断の材料となる昆虫アレルゲンが十分に手にはいらなかった事と、従来問診を重視し(以然重要な診断方法ではあるが)、確かな接触による喘息発

作がない場合は、原因アレルゲンとしなかった事によると思われる。昆虫のように死骸の aged material もアレルゲン性を有する場合には、接触と喘息発生との因果関係がはっきりしないと考えられ、アレルゲンによる診断がより重要となってくる。

そこで、演者は蛾および蝶の標本からアレルゲンを抽出し、一般の気管支喘息者に種々のアレルギー学的検査を施行し、次の結論を得た。

1) 当科喘息外来に来院した一般の喘息患者66例のうち、蛾抽出液 10^{-4} で37例 (56.1%) が、さらに蝶抽出液 10^{-4} で34例 (51.5%) が皮内反応陽性であった。

2) 上記の皮内反応陽性者のうち20例 (54.1%) に蛾に対する RAST が陽性であり、さらに22例 (64.7%) に蝶に対する RAST が陽性であった。すなわち全喘息患者の約 1/3 の血中に蛾や蝶に対する特異的抗体が検出された。

3) 蛾および蝶による皮内反応、PK 反応さらに RAST が陽性の患者は、そのアレルゲンの吸入によって明らかに喘息が誘発された。皮内反応陰性、RAST 陰性の患者には、誘発はおこらず、非特異的な反応によるものではないことが明らかとなった。

4) 皮内反応の一致率から、蛾と蝶のアレルゲンとしての共通抗原性がうかがわれた。

5) 上記の結果に、昆虫の生態を考えあわせると、蛾や蝶は気管支喘息のアレルゲンとして、カンジダや室内塵と同等の意義を持っており、さらに研究することによって、気管支喘息の診断と治療に大いに役立つものと考えられる。

6. 肺結核外科的療法の現状からみた空洞形成術の意義

胸部外科 山本博昭

化学療法の発達した今日、肺結核の外科的療法の、排菌源の除去という目的からすれば空洞形成術のごとき局所療法で十分であることをこれまで度々報告してきた。しかし、一般には本法に対してなお 1) 肺結核の治療が空洞 (排菌源) のみの処理で十分であるのか? 2) 空洞形成術として行われているような操作で病巣の治癒が得られるのか? の疑問が残されているようである。そこで、この2点について、われわれの臨床成績をもとに解答したい。

(1) 空洞形成術の成績

昭和40年以降延78回の空洞形成術を施行し死亡率は3例のみである (表1)。とくに、下葉の孤立性空洞例や、肺切除術では全別になるような例には空洞形成術は効果的である。

(2) 肺結核外科的療法の局所療法で十分であるか?

413例の肺葉切除術を行なった切除肺の検討から、今日の外科療法として代表されている肺葉切除術においても、その半数例には対側をも含めて残存病巣が存在し、この術式がすべての病巣を切除するものではない。しかも、切除肺葉内に含まれる病巣は肺葉切除術後の遺残病巣と主たる病巣 (多くは空洞性病変) をのぞけば大差が

空洞形成術74例の成績

| 療研外科的 難治度分類 | 非 難 治 | | 軽 度 難 治 | | 中 等 度 難 治 | | 高 度 難 治 | | 超 高 度 難 治 | |
|-----------------|-------|---|---------|----|-----------|-----|---------|---|-----------|----|
| (同時) 肋骨切除の有無 | — | + | — | + | — | + | — | + | — | + |
| 症 例 数 | 18 | | 25 | | 21 (2) | | 2 | | 21 (2) | |
| * () 内再手術例 | 9 | 9 | 4 | 21 | 6* | 15* | 1 | 1 | 5* | 7* |
| 死 亡 例 | 0 | | 0 | | 0 | | 0 | | 1 | 2 |
| 合 併 症 例 | 0 | 1 | 0 | | 1 | 1 | 0 | | 0 | 2 |

合併症：膿胸・肺癰・肺性脳症・空洞再開 (非手術) をいう

ない。換言すれば、肺葉切除術では同一肺葉内に含まれるとの理由のみで撒在性病巣を同時に切除し、それら病巣と同じ程度の病巣は術後の化学療法に依存していることが考えるなら、主病巣以外の病巣も残存させて術後の化学療法に頼ることも可能であろう。とくに肺機能を温存する意図があるものではそうあるべきだと考える。

(3) 空洞形成術による病巣の治癒形式

空洞形成術は、空洞を切開し、乾酪性物質を廓清・誘導気管支が閉鎖した後、一次的に空洞を縫縮閉鎖するものであり、かかる局所的操作の後、周囲の肺組織により施術部を圧排させることによって線維化へ導びこうとするものである。すなわち線維瘢痕性治癒を求める術式である。

われわれは57才男子の例で偶然術後1年半後に施術部が採取しうる機会を得、組織学的に検索した結果期待通りの成績をえた。これはX線学的にも確認出来る。

ま と め

肺結核治療が化学療法に信頼をおけるようになった今日では、空洞形成術のごとき局所療法が、単に重症例のみならず、機能保存の意味において肺葉切除術と同様な意義ある術式として評価されるべきである。

7. 循環障害にもとづく肺疾患（第1報）急性肺水腫の成立機序

臨床肺生理 佐藤公彦，林 興義，李泰 興

3-Methylindole の肺血管系に対する影響を、成犬を用いて観察した。

3-Methylindole の投与により、肺リンパ流量およびその蛋白含量の増加を来す。このことは、肺血管の漏出機構が亢進したものと考ええる。

肺動脈圧および体動脈圧には、大きな変動を認めない。

気管内圧は、投与後10～20分で、持続的に上昇してくる。すなわち、肺コンプライアンスの低下を生ずる。

組織学的には、初期に肺胞毛細管の充血、および、血管、細気管支周囲の水腫性拡張をみとめ、数時間をへて、肺胞内水腫と胸腔内漏出液が出現する。

電顕的観察では、間質性肺水腫および肺胞毛細血管内皮細胞の浮腫性変化をみとめ、数時間を経過すると、I型上皮細胞と内皮細胞の破綻が生ずる。

以上の結果より、3-Methylindole により、急性期には肺水腫が招来されるが、その発生機序は、肺血管系に対する、cytotoxic な影響によるものと考えられる。

シンポジウム “肺癌研究の現状と未来への展望”

司会 大 島 駿 作（内科学第二）

昭和42年当研究所の名称が「結核研究所」から「結核胸部疾患研究所」に変更されて以来、臨床部門のみならず基礎医学部門においても多数の研究者が癌について研究するようになってきた。従って癌、特に肺癌に関する研究は現在当研究所における共通の話題の一つであると考え、これを討論のテーマとして選んだ。

肺癌に関する研究は基礎研究、臨床研究の何れについても未解決の問題が多く、最終目標である肺癌の完全治癒に到達する迄には未だ幾多の迂余曲折が予想される。将来を論ずるためにはまず現状の把握からという考え方に基づいてこの討論会を編成した。

(1) 培養癌細胞膜抗原を利用する癌診断の試み：森川 茂，陳 世沢，戸部隆吉，安平公夫（病理）

演者らはヒト悪性腫瘍細胞の培養を試み、そのうち胃癌患者腹水より樹立分離した3株の腫瘍性細胞と、肺癌患者胸水より得た1株について腫瘍特異抗原を検出した。これらの癌特異抗原保有細胞を用いて患者血清中の抗体の有無について蛍光抗体法間接法を用いて検査し、診断面での応用を目的として研究した。

その結果、担癌患者血清中細胞膜と反応する成分は、免疫学的な同定により IgG であることが判った。IgA, IgM 成分は証明されず α_2 マクログロブリンも検出されなかった。患者血清中抗体の検出率は、胃腺癌患者16例

中13例, 結腸癌 5 例全部, 肺腺癌11例中 6 例, 膀胱癌 1 例が陽性であった。腺癌全体として35例中27例が陽性である。これ以外の悪性腫瘍 8 例, 非癌患者および健康者では陰性, 妊娠中期から末期にかけて陽性反応を示した例も認めた。

(2) 機能性肺腫瘍の組織化学：伊藤元彦（胸部外科）

肺の機能性腫瘍の自験例から組織化学的検討の所見を中心に報告した。

まず, セロトニン産生肺癌および ADH- β MSH-ACTH 産生肺癌では, 培養細胞を用いた組織化学的検討や “function” に影響を与える諸因子について検討を行ない, “function” は腫瘍のおかれている環境に左右されるという結論に達した。

つぎに alkaline phosphatase (Regan) 産生肺癌では組織化学的および電顕的に検討し, alkaline phosphatase が細胞膜以外にも存在することを指摘した。

最後に amylase 産生肺癌について免疫組織学的に検討し, 腫瘍細胞自身の amylase 産生を証明し, さらにその発生母地として気管支腺や末梢肺癌領域に amylase 産生細胞が見出されることを証明した。

(3) 培養癌細胞の癌化学療法への応用：長瀬千秋（胸部外科）

演者は肺癌に対する化学療法をより効果的にする目的で, *in vitro* で培養癌細胞を使って制癌剤感受性試験を行なった。方法としては癌細胞のコロニーを作らせて, 制癌剤によって増殖が抑制される程度を定量的に測定する方法を用いた。培養容器としてマイクロプレートを用いることによって僅かなスペースで多数の検体が処理し得るように工夫した点に特徴がある。判定はマイクロプレートの各ウェルについて顕微鏡下でマイクロコロニーの数を算定して薬剤の制癌効果を定量的に測定した。この方法を用いて L-1210 細胞について測定した成績を dye exclusion method の成績と比較した結果本法の方が鋭敏でかつ正確なデータが得られた。以上の実験成績より本法は今後臨床的にも利用し得る優れた制癌効果測定法であると思われる。

(4) 疫学：泉 孝英（内科学第二）

京滋地区における肺癌の疫学的調査結果を京滋肺癌研究会を代表して報告した。現在登録された肺癌患者は 274 例, そのうち 205 例 (76%) は細胞型が明らかな確診患者であった。好発年齢は 60 才～79 才で 170 例 (63%) がこの年齢層に属していた。外科的に切除できたものは 50 例 (23%) に過ぎなかった。しかし最近 10 年間の統計資料によれば最近肺癌患者数の増加の傾向が見られ, 今後この種の調査に対する一層の医師の協力をお願いしたい。

(5) 外科療法：寺松 孝（外科）

現在肺癌外科の問題点は, (1) 治癒切除率の向上, (2) 有効な併用療法の確率, (3) 組織型別による対策の確立, の 3 点である。この観点から京大胸部研および愛知がんセンターの臨床成績について報告した。

1) 切除率は 30% (そのうち治癒切除率は 60～70%), 治癒切除後の 5 年生存率は 50% に近かった。

2) 併用療法については病期 I のものでは治癒切除後放射線療法や化学療法を併用しても併用しなくても生存率にはほとんど差がなかったが, 病期 II 期の群では外科療法と化学療法の併用群が最も高い生存率を示した。

3) 扁平上皮癌では外科療法と放射線療法の併用が最も成績が良かったが, 一方腺癌では外科療法と化学療法の併用が最も優れていた。この理由は腺癌は扁平上皮癌と比べて遠隔転移が多いためと思われる。

一般的にみて治癒手術を行ない得た場合は小細胞性未分化癌を除けば何れの組織型でもほぼ等しい高い 5 年生存率が得られたことより肺癌の治療に肝心なことは早期発見による治癒切除療法であると思われる。

(6) 化学療法：中西通泰（内科学第一）

急性白血病に比べると分裂のサイクルにのった細胞が極端に少なく, 発育の遅い肺癌では, 制癌剤に対する感受性は低く, 進行肺癌に対する化療は無効である。しかし化療に対し response のある患者は, ない患者よりは生存期間が長いので, response のある限り長く続けるのが化療の原則で, そのために多剤併用間歇療法が試みられる。この方法で化療剤の毒作用と免疫抑制が軽減される。根治手術後の adjuvant としての化療に期待が持たれるが, 小細胞癌に対する Cyclophosphamide が延命に有効である以外は成績が悪い。これは患者の防衛機構を何かの形で障害したためと考えられる。生体の免疫能力との関係が肺癌でも認められるので免疫療法が今日で

は広く行なわれるようになった。

手術によって、腫瘍の大部分を除去し、残った少数の癌細胞の処理に、破壊的な化療と細胞免疫を主とした防衛力を高める免疫療法を行なうのが現実の目標であろう。

(7) 放射線療法：阿部光幸（放射線科）

1) 肺癌に対する放射線療法を強化するため、95%酸素、5%炭酸ガス吸入下での放射線治療を試み、患者の3年生存率の改善を認めたが、根治率の向上には結びつかなかった。

2) 不均等分割照射は現在での時点で3年生存率が22.2%であり、これを従来の均等分割照射の3年粗生存率4.5%と比較すると極めて優れた成績と言えよう。この成績は混合ガス吸入下照射の成績と比較しても明らかに良好であった。

3) 術中照射は主病巣が大部分切除され、手術的に廓清できない病巣が限局性に遺残した場合に適用すれば、正常肺組織の障害を最少限にすることができるので有力な治療術式になると考えられる。1回線量は腫瘍の大きさ、組織型により異なるが、2,500~3,000 rads の領域が適当と思われる。

(8) 予後：佐藤篤彦（内科学第二）

肺癌 209 例について発見当時の自覚症状と予後との関連性について追跡調査を行なった。その結果自覚症状を基準に Feinstein の分類に従って患者を分類すると病期および予後とよく相関していたことより、肺癌患者における初診時の自覚症状の重要性について注意を喚起した。

以上の発表に続いて長石忠三先生、辻 周介先生および岡田慶夫先生から特別発言をいただいた。

まとめ：

肺癌は近年急速に増加してきた難治性肺疾患の一つである。その難治性の理由としては肺癌が比較的早期に肺門や縦隔のリンパ節、またあるものは遠隔部位に転移巣を形成することが挙げられる。従って肺癌治療の実際に当っては①早期診断②充分な外科療法③転移巣に対する有効な全身療法、の3者の協力が必要となる。しかし現実には未だ理想の域に達するまでには至っていないけれども今日の討論会における報告にもみられるように多方面からの研究がなされており、近い将来肺癌の根治が可能になることが期待される。

II 胸部研談話会

第1回 癌原性炭化水素による発癌機構の解明に向けて 高橋権也（病理）(51.10.14)

第2回 気管支喘息について 川合 満(内科第一)、木野稔也(内科第二)、宮本正昭(東大物療内科) (51.12.2)

III 特別ゼミナール

第65回 奥山 治美（名古屋市大薬）

リン脂質の脂肪酸パターン決定における2つの要因 (51.6.12)

第66回 丸山 工作（京大理）

筋肉の弾性蛋白質 (51.7.3)

第67回 前田 敏弘（滋賀医大）

アミンニューロンとその終末 (51.7.31)

第1回シンポジウム“肺の微細構造と機能—肺表面活性を中心として—” (51.12.18)

肺胞被覆層の超微形態学的研究

岡田 慶夫（滋賀医大）

周生期の肺の発達と新生児特発性呼吸困難症候群

小川 雄之亮（名市大医）

ガスマスによる肺磷脂質の研究

齊藤 国彦（関西医大）

脂質代謝異常と肺表面活性物質

鈴木 康弘（京大胸部研）

人およびラット肺発生の比較超微形態学的研究

安田 寛基（帝京大医）

総括討論

加藤 幹夫（京大胸部研）

IV その他

Prof John R. David (U.S.A. Harvard 大 内科)

Delayed hypersensitivity in vitro (51.9) 主催 内科第二

Prof Hal J. Colebatch (オーストラリア, New South Wales 大 内科) :

Pulmonary Mechanics in diagnosis of airway disease (51.12) 主催 肺生理

業 績 目 録

内 科 学 第 1

〔学 会 発 表〕

- 前川暢夫：RFP 使用症例の検討，日本結核化学療法研究会総会（50.6）
- 前川暢夫，武田貞夫：耐性検査培地の性能に関する検討（1），同（50.11）
- 川合 満，前川暢夫，中西通泰，久世文幸，武田貞夫，小田芳郎，南野正隆，吉見輝也：気管支喘息患者に於ける Triamcinolone acetate の治療効果とその副腎皮質機能に及ぼす影響について，第73回日本内科学会総会（51.4）
- 前川暢夫，中西通泰，川合 満，久世文幸，武田貞夫，小田芳郎，江部康二，網谷良一：肺結核患者発見の動機に関する検討，第51回日本結核病学会総会（51.5）
- 久世文幸，前川暢夫，稲葉宣雄，大井 豊，山田栄一：未治療（初回）肺結核に対する強化化学療法に関する研究，同（51.5）
- 中西通泰，前川暢夫，川合 満，久世文幸，武田貞夫，小田芳郎，江部康二，網谷良一：進展する気管支拡張症，第16回日本胸部疾患学会総会（51.6）
- 前川暢夫，池田宣昭，稲掛英男：結核菌の発育に不適当な条件と化学療法（ガス曝露と化学療法剤の効果），日本結核化学療法研究会総会（51.6）
- 久世文幸，倉沢卓也，江部康二，前川暢夫，鈴木康弘：肺にびまん性陰影を示したクリプトコッカス感染症の疑われる一症例，第89回日本内科学会近畿地方会（51.7）
- 沢田賢三，西山秀樹，江部康二，小田芳郎，久世文幸，川合 満，中西通泰，前川暢夫，清水慶彦，鈴木康弘：原発性肺細網肉種の一症例，第25回肺癌学会関西支部会（51.7）
- 川合 満，前川暢夫：重症喘息発作とその治療，第26回日本アレルギー学会総会（51.9）
- 中西通泰，前川暢夫，川合 満，久世文幸，小田芳郎，江部康二，細川昌則，西山秀樹，沢田賢三，長谷光雄，坂東憲司，望月吉郎，網谷良一：気管支拡張症を伴った大動脈炎症候群，第12回日本胸部疾患学会近畿地方会（51.11）
- 川合 満：気管支喘息の治療，とくに副腎皮質機能を考慮した治療について，第2回胸部研談話会（51.12）
- 前川暢夫，池田宣昭，稲掛英男：RFP 使用症例の検討（第2報），日本結核化学療法研究会総会（51.12）
- 前川暢夫，池田宣昭，稲掛英男：アミノ配糖体高度耐性菌の交叉耐性，同（51.12）
- 前川暢夫：最近の結核化学療法について，第24回日本化学療法学会西日本支部総会（51.12）
- 久世文幸：非定型抗酸菌の薬剤感受性（シンポジウム），同，（51.12）
- 西山秀樹，前川暢夫，笹田昌孝，沢田博義，中村 徹，内野治人：白血病患者に於ける感染症と白血球機能の関連，同（51.12）
- 種田和清，倉沢卓也，岩田猛邦，笹沼竹雄，松原恒雄，小橋陽一郎，山辺博彦：特異な転移を示した肺癌の一例，第91回日本内科学会近畿地方会（51.12）

〔誌 上 発 表〕

- 磯部喜博，岡本博史，直木由太郎，吉田敏郎，中沢一郎，山内立夫，小河節子，池田宣昭，小沢 晃，馬淵尚克：RFP 使用症例の検討（第1報），医療，30：30 昭51
- 川合 満，前川暢夫：Unilateral Hyperlucent Lung (Swyer-James または MacLeod 症候群) の1例，日胸疾患誌，14：143～150, 1976

前川暢夫：非定型抗酸菌症 薬物療法，9：3，昭51

久世文幸：非定型抗酸菌の薬剤感受性，薬物療法，9：9～14，1976

中西通泰：気管支拡張症，（分担執筆）今日の治療指針，医学書院，p. 145，1976.

寺松 孝，中西通泰：結核の治療法の変遷，日本医事新報，N.o 2736, 3，昭51

内 科 学 第 2

1. 免疫学の基礎的領域に関する研究

〔学会，研究会発表〕

桂 義元，湊 長博，泉 孝英：Virus plaque 法による遅延型過敏症の解析，昭和50年度日米医学協会結核専門部会会議（51.2）

Katsura, Y., Izumi, T., Minato, N.: Antigen reactive lymphocytes detected by virus plaque assay: Suppressor T-cells involved in delayed-hypersensitivity. 11th Joint meeting tuberculosis panel. U. S.-Japan Co-operative medical science program (1976. 9)

高橋千恵，太藤重夫，泉 孝英：マウスにおける接触過敏症に関する研究（第3報）接触過敏症の suppression，第26回日本アレルギー学会総会（51.9）

桂 義元，湊 長博他：Vesicular stomatitis virus による遅延型過敏症の増強，第6回日本免疫学会総会 Workshop V. 細胞性免疫のパラメーター（51.12）

湊 長博，桂 義元：マウスのヒツジ赤血球に対する免疫反応におけるウイルス感受性の抗原特異的T細胞，第6回日本免疫学会総会（51.12）

高橋千恵，太藤重夫，西川伸一，桂 義元，泉 孝英：DNFB 塗布による DNP 特異性抗体の産生機構—接触過敏症との関連について，第6回日本免疫学会総会（51.12）

西川伸一，高沖宗夫，泉 孝英，桂 義元：タンパク抗原に対する免疫記憶の研究，in vitro の解析，第6回日本免疫学会総会（51.12）

湊 長博，桂 義元：ウイルスの遅延型アレルギー発現に対する影響，第37回実験結核研究会総会（51.1.2）

〔誌上発表，研究報告〕

桂 義元，湊 長博，泉 孝英：Virus plaque 法による遅延型過敏症の解析，昭和50年度日米医学協力計画報告書（結核専門部会）p. 287

Minato, N., Katsura, Y.: Enumeration of antigen reactive T-cells against sheep erythrocytes by the virus plaque assay. Japan. J. Microbiol., 20(4): 351, 1976.

Katsura, Y., Minato, N.: Detection of tuberculin reactive cells with virus plaque assay. Japan. J. Tub. Chest Dis, 20 (1-2): 7, 1976.

高橋千恵，太藤重夫，泉孝英：接触過敏症研究における最近の動向，皮膚科の臨床 18(10)：687，1976.

2. 結核アレルギーに関する研究

〔学会，研究会発表〕

大島駿作，大山口渥：モルモットにおけるツベルクリンアレルギーの受身伝達機構に関する研究—リンパ球について，昭和50年度日米医学協力研究会結核専門部会会議（51.2）

大島駿作，大山口渥，松井祐佐公，門 政男，佐藤篤彦，木野稔也，小原幸信：動物におけるツベルクリンアレルギーの受身伝達機構に関する研究—Tリンパ球について，第51回日本結核病学会総会（51.6）

大山口渥，湊 長博，佐藤篤彦，木野稔也，大島駿作：動物におけるツベルクリンアレルギー受身伝達機構：T-cell に関して，第36回実験結核研究会（51.6）

〔研究報告〕

大島駿作, 大山口渥: モルモットにおけるツベルクリンアレルギーの受身伝達機構に関する研究—リンパ球について, 昭和50年度日米医学協会計画報告書(結核専門部会) p. 297

3. 肺癌に関する研究

〔学会発表〕

佐藤篤彦, 大島駿作: ゼロトモグラフィによる肺癌の観察, 第25回日本肺癌学会関西支部会 (51.7)

松井祐佐公, 真弓哲二, 佐藤篤彦, 泉 孝英, 大島駿作: 肺癌症例における免疫学的動態, 第25回日本肺癌学会関西支部会 (51.7)

松井祐佐公, 木野稔也, 大島駿作: 肺癌の細胞性免疫に関する研究“肺癌患者末梢血リンパ球と肺癌組織抽出液との培養上清のマクロファージ遊走阻止能, 第17回日本肺癌学会総会 (51.10)

真弓哲二, 大山口渥, 松井祐佐公, 佐藤篤彦, 泉 孝英, 大島駿作: 肺癌患者の免疫機能に関する研究(第4報) ^{60}Co 放射線照射療法の免疫機能に及ぼす影響について, 第17回日本肺癌学会総会 (51.10)

泉 孝英, 長井苑子, 杉之下俊彦: 肺癌患者の免疫機能に関する研究(第5報) 肺癌患者血清の免疫抑制作用について, 第17回日本肺癌学会総会 (51.10)

〔誌上発表〕

佐藤篤彦, 大島駿作, 浜川純一, 蔵岡信良, 曾我部康之: ゼロトモグラフィによる肺癌の臨床, 日本胸部臨床, 35(11): 680, 昭51

4. 気管支喘息に関する研究

〔学会発表〕

木野稔也, 今井弘行, 松井祐佐公, 大島駿作: 昆虫による気管支喘息の研究(第Ⅱ報) 蛾および蝶特異的 Ig E の季節変動とハウスダストおよびダニ特異的 Ig E との関係, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51.6)

木野稔也, 今井弘行, 松井祐佐公, 大島駿作: 昆虫による気管支喘息の研究(第Ⅲ報) 蛾および蝶特異的 Ig E とダニおよび H. D 特異的 Ig E の相互関係, 第26回日本アレルギー学会総会 (51.9)

〔誌上発表, 研究報告〕

木野稔也: 気管支喘息におけるアレルギーの検索—蛾および蝶のアレルゲンとしての意義, 昭和50年度藤原記念財団研究業績報告集 p. 46

木野稔也, 今井弘行, 大島駿作: 昆虫による気管支喘息の研究(第1報) 蛾および蝶のアレルゲンとしての意義, アレルギー 25(6): 525, 昭51

5. サルコイドーシスに関する研究

〔学会, 研究会発表〕

北市正則, 西川伸一, 泉 孝英: 実験時肉芽腫形成について, 厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班昭和50年度班会議 (51.2)

泉 孝英, 西川伸一: 健康診断において発見されたサルコイドーシス症例の予後, 厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班昭和50年度班会議 (51.2)

山本正彦, 泉 孝英他: わが国におけるサルコイドーシス患者の経過およびそれに影響をあたえる因子について—全国症例775例の分析より—, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51.6)

泉 孝英, 西川伸一, 大山口渥, 木野稔也, 森岡茂治: 健康診断によって発見されたサルコイドーシス症例の

予後, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51.6)

古家 堯, 泉 孝英他: サルコイドーシス患者の心電図異常所見について (第1報) 臨床例の検討, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51.6)

泉 孝英: サルコイドーシス 患者血清の免疫抑制作用, 第16回日本胸部疾患学会 サルコイドーシス 自由集会 (51.6)

Izumi, T. et al.: Significance of mediastinoscopic biopsies in cases with single involvement in eye suspicious of sarcoidosis 2nd European Symposium on Sarcoidosis (Berlin) (1976. 11)

Izumi, T.: Experience with an Edinburgh Kveim antigen in Japan. 2nd European Symposium on Sarcoidosis (Berlin) (1976. 11)

〔誌上発表, 研究報告〕

平賀洋明, 泉 孝英他: サルコイドーシスの肺野病変分類試案, 昭和50年度厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班研究業績, p. 125, (51. 3)

古家 堯, 泉 孝英他: サルコイドーシス患者の心電図異常所見について (第1報) 臨床例の検討, 昭和50年度厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班研究業績, p. 137, (51. 3)

泉 孝英: 健康診断によって発見されたサルコイドーシス症例の予後, 昭和50年度厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班研究業績, p. 229, (51. 3)

北市正則, 西川伸一, 泉 孝英: 肺における類上皮細胞肉芽腫形成に関する実験時研究(第1報), 昭和50年度厚生省特定疾患サルコイドーシス調査研究班研究業績, p. 70, (51. 3)

泉 孝英: VII サルコイドーシス, B. 病因—免疫学的な立場から—伊藤文雄, 前川暢夫編集, 全身性疾患の肺病変, p. 153, 世界保健通信社, 大阪 昭51

Hosoda, Y., Izumi, T., Oshima, S., Tsuji, S. et al.: A cooperative study of sarcoidosis in Asia and Africa: Descriptive Epidemiology. Ann. New York Acad. Sci., 278: 347, 1976.

Matsui, Y. Izumi, T. et al.: Clinico-pathological study on fatal myocardial sarcoidosis. Ann. New York Acad. Sci., 278: 445, 1976.

Johns, J., Tsuji, S. et al.: The problem of the treatment of sarcoidosis. Ann. New York Acad. Sci., 278: 743, 1976.

泉 孝英: サルコイドーシス, 阿部正和他編, 新臨床内科学第2版, p. 118. 昭51

泉 孝英, 西川伸一: 診断基準とその使い方, サルコイドーシス, Medicina, 13(13): 102, 1976.

6. 肺線維症に関する研究

〔学会, 研究会発表〕

平田健雄, 泉 孝英: 流血中の Immune-complex 証明法—血小板凝集法—に関する基礎的研究, 昭和50年度厚生省特定疾患, 肺線維症調査研究班班会議 (51. 2)

辻 周介, 平田健雄, 泉 孝英: 流血中の Immune complex 証明法—血小板凝集法—に関する基礎的研究, 昭和50年度文部省総合研究“肺線維症”第2回班会議 (51. 3)

大島駿作, 泉孝英: ステロイド剤の免疫反応に及ぼす影響に関する研究, 昭和51年度文部省総合研究“肺線維症”第1回班会議 (51. 3)

北谷文彦, 泉孝英: 近畿地区における肺せんい症の現況(第2報), 第42回日本結核病学会, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51. 11)

平田健雄: III型アレルギー (Arthus 型反応) からみた間質性肺炎, 第42回日本結核病学会, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会シンポジウム「肺と免疫」 (51. 11)

〔研 究 報 告〕

平田健雄, 泉 孝英: 流血中の Immune-complex 証明法—血小板凝集法—に関する基礎的研究, 厚生省特定

疾患, 肺線維症調査研究班, 昭和50年度研究報告書「肺線維症の成因, 治療及び予防に関する研究」, p. 121, (51. 3)
滝島 任, 泉 孝英他: 肺線維症のための免疫学的, 生化学的および呼吸生理学的検査, 厚生省特定疾患肺線維症調査研究班昭和50年度研究報告書「肺線維症の成因, 治療及び予防に関する研究」, p. 149, (51. 3)

7. 産業性肺疾患に関する研究

〔学 会 発 表〕

泉 孝英: ベリリウム肺について, 産業衛生学会第18回じん肺研究会特別講演 (51. 2)
泉 孝英, 西川伸一, 平田健雄, 小原幸信, 折田雄一: 慢性ベリリウム肺に関する研究 (第2報) 慢性ベリリウム肺症例の臨床経過, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51. 6)

〔誌 上 発 表〕

西川伸一, 泉 孝英: ベリリウム症, 最新医学, 31(8):1515, 昭51
泉 孝英, 西川伸一: 本邦における慢性ベリリウム肺, 日本胸部臨床, 35(11):805, 昭51
Izumi, T., Kobara, Y. et al.: The first seven cases of chronic beryllium disease in ceramic factory workers in Japan, Ann. New York Acad. Sci., 278: 618, 1976

8. 呼吸器疾患の免疫学的研究

〔学 会 発 表〕

泉 孝英, 西川伸一, 平田健雄: 類上皮細胞肉芽腫形成性肺疾患の免疫学的動態に関する研究 第73回日本内科学会総会 (51. 5)
西川伸一, 泉 孝英: 呼吸器疾患患者の免疫学的動態に関する研究 (第4報) 血清 IgA 高値の免疫学的意義, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51. 6)
門 政男, 大島駿作: 慢性呼吸器感染症患者の気管支洗浄液中の免疫グロブリン・リゾチームに関する研究, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51. 6)
泉 孝英, 西川伸一, 平田健雄: 類上皮細胞肉芽腫形成性肺疾患の免疫学的動態, 第4回日本臨床免疫学会総会 (51. 7)
平田健雄, 泉 孝英: 血小板凝集反応による Immune-complex 検出法の特性に関する基礎的研究, 第4回日本臨床免疫学会総会 (51. 7)
杉之下俊彦, 長井苑子, 泉 孝英: ヒト血清の免疫抑制作用に関する研究 (第1報) 肺癌, サルコイドーシス, 慢性ベリリウム症および肺結核患者血清の抗 SRBC 産生抑制作用, 第26回日本アレルギー学会総会 (51. 9)

〔誌 上 発 表〕

泉 孝英: 肉芽腫性疾患“免疫”, 最新医学, 31(8):1467, 昭51
泉 孝英: 外因性アレルギー性肺炎, 臨床科学, 12(9):1165, 昭51
門 政男: 呼吸器における局所免疫—気管支洗浄液中の免疫グロブリンおよび lysozyme について, 日本胸部臨床, 35 (12): 893, 昭51

9. 症 例 報 告〔学会発表〕

北市正則, 木野稔也, 松井祐佐公: 肺を含み全身性アミロイドーシスを合併した骨髄腫の1例, 第89回日本内科学会近畿地方会 (51. 7)
佐藤篤彦, 松井祐佐公, 今井弘行, 大島駿作, 本田和徳, 山本 寿, 高田悠紀: 肺癌と鑑別診断を要した気管支結核11例の臨床的検討, 第51回日本結核病学会総会 (51. 6)
北市正則, 小原幸信, 中村正義: 肺動静脈瘻の1例, 第89回日本内科学会近畿地方会 (51. 7)

10. 講演会, 談話会など

大島駿作：サルコイドーシス，国立結核センター招請講演，ビルマ，マンダレー，ラングーン (51.2)

大島駿作：サルコイドーシス，Persahabatan 病院招請講演，インドネシア，ジャカルタ (51.2)

大島駿作：サルコイドーシス，Airlangga 大学招請講演，インドネシア，スラバヤ (51.2)

木野稔也，松井祐佐公：MIF test における問題点，第3回京大臨床免疫同好会 (51.4)

大島駿作：遅延型アレルギー，日本短波放送 (51.7)

寺松 孝，大島駿作：縦隔腫瘍，日本短波放送 (51.7)

泉 孝英：ヒト血清中の免疫抑制作用物質について，第4回京大臨床免疫同好会 (51.9)

湊 長博：Virus plaque 法による遅延型過敏症の解析，第4回京大臨床免疫同好会 (51.9)

西川伸一：たんぱく抗原に対する免疫記憶，第4回京大臨床免疫同好会 (51.9)

大島駿作：結核の家庭療法，MBS 放送 (51.10)

大島駿作：肺癌と免疫，京都胸部医会 (51.11)

木野稔也：昆虫アレルギーと気管支喘息（昆虫アレルゲンの重要性について），第2回胸部研談話会 (51.12)

泉 孝英：ヒト血清の免疫抑制作用について，第28回国立大学附置研究所結核及び胸部疾患談話会 (51.12)

11. そ の 他

〔学 会 発 表〕

大川欣一，北市正則：酸性領域での DAB によるカタラーゼの細胞化学，第32回日本電子顕微鏡学会総会 (51.4)

〔誌 上 発 表〕

大島駿作，佐藤篤彦：腎疾患，伊藤文雄，前川暢夫編集，全身性疾患の肺病変，p. 75，世界保健通信社，大阪，(51.4)

胸 部 外 科 学 部

〔学 会 発 表〕

1. 腫 瘍

伊藤元彦：機能性腫瘍の組織化学的研究 京大胸部研講演会シンポジウム (51.1)

長瀬千秋：in vitro における制癌剤感受性試験，同上 (51.1)

福田治男，伊藤元彦：アミラーゼ産生肺癌の発生母地に関する研究，第24回肺癌学会関西支部会 (51.2)

松原義人，滝 俊彦，福田治男，甲斐隆義，船津武志，池田貞雄，長瀬千秋他1名：多剤併用化学療法による肺癌の長期生存例，同上 (51.2)

滝 俊彦，福田治男，松原義人，甲斐隆義，池田貞雄，船津武志他3名：6才の小児にみられた気管支腺腔，同上 (51.2)

中島道郎，立石昭三他：肺気腫の長期経過中に続発した肺癌症例，同上 (51.2)

玉田二郎，人見滋樹他5名：胸椎原発の巨細胞腫の1例，同上 (51.2)

丸山 泉，人見滋樹，玉田二郎：肺転移巣の自然治癒をみた腎癌の1例，同上 (51.2)

岡田英彦，倉田昌彦他3名：高令者（70才以上）肺癌手術例の経験，同上 (51.2)

長瀬千秋，伊藤元彦，寺松孝：いわゆる肺の小細胞癌の予後に関する臨床的ならびに病理学的考察，同上 (51.2)

人見滋樹，玉田二郎，伊藤元彦，寺松 孝：High risk group の肺癌集団検診，肺門部早期肺癌に関する厚生省班会議 (51.2)

伊藤元彦，長瀬千秋，福田治男，安倍隆二，寺松 孝：Ⅲ期肺癌の治療——隣接組織合併切除に関連して，日本外科学会総会 (51.4)

伊藤元彦：呼吸器の細胞診，スライドカンファレンス出題，大阪細胞診研究会 (51.5)

長瀬千秋, 高島義光, 渡部 智, 松本守海, 清水慶彦, 安倍隆二, 伊藤元彦, 山本博昭, 寺松 孝: 進行肺癌に対する外科的治療の適応限界について, 第19回日本胸部外科学会関西地方会 (51.6)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 福田治男, 光岡明夫, 永田明義: 気管支肺胞系の防禦機構としての気管支腺の意義について (第2報) 第16回日本胸部疾患学会総会 (51.6)

北野司久: 肺癌における免疫化学療法の可能性, 第25回肺癌学会関西支部会シンポジウム (51.7)

長瀬千秋: 肺癌術後の adjuvant chemotherapy における薬剤の選択, 同上シンポジウム (51.7)

二宮和子, 滝 俊彦, 福田治男, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄他2名: 高 Ca 血症を伴った肺癌の1例, 同上 (51.7)

浜本康平, 立石昭三他: 気管支壁内転移を疑われた腎腫瘍の1剖検例, 同上 (51.7)

人見滋樹, 玉田二郎他1名: 縦隔鏡検査による後気管, 旁食道, 下部気管分岐部リンパ節の生検——食道癌, 肺癌症例への応用, 同上 (51.7)

麻田邦夫, 倉田昌彦他7名: 腎癌の転移性肺腫瘍の検討, 同上 (51.7)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 高島義光, 安倍隆二 他1名: Alkaliphosphatase (Regan) 産生肺癌の1例, 同上 (51.7)

佐藤新太郎, 伊藤元彦: 胸水中の肺腺癌細胞と肺巨細胞癌細胞の比較検討, 日本臨床細胞学会 (51.7)

人見滋樹, 船津武志: 後気管縦隔鏡検査法の検討, 縦隔疾患に関する厚生省班会議 (51.7)

倉田昌彦他3名: 乳癌と他臓器悪性腫瘍との合併2例, 第24回乳癌研究会 (51.7)

倉田昌彦他3名: 乳腺線維肉腫の1例, 同上 (51.7)

松本守海, 山本博昭, 寺松 孝: 肺癌患者における尿中 Dehydro epiandrosterone-sulfate (DHA-S) の臨床的意義, 第13回術後代謝研究会 (51.7)

長瀬千秋, 高島義光, 伊藤元彦, 寺松 孝, 北野司久: microplate の使用による制癌剤感受性試験の試み (第3報) 第14回日本癌治療学会総会 (51.9)

松村理司, 山里有男, 中納誠也, 井上律子, 小林君美: 左側巨大ブラを伴った肺癌の1例, 83回岐阜外科集談会 (51.9)

船津武志, 松原義人, 池田貞雄, 滝 俊彦, 甲斐隆義他4名: 肺癌の予後——とくに縦隔鏡検査所見との対比を中心に, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.9)

人見滋樹, 玉田二郎他2名: 転移性肺癌の外科——剖検しえた転移性肺癌152例の検討から, 同上 (51.9)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 高島義光, 安倍隆二, 寺松 孝: 転移性肺腫瘍の外科的治療——とくに多発性転移巣に対する外科的治療の意義と適応について, 同上 (51.9)

長瀬千秋, 高島義光, 伊藤元彦, 寺松 孝, 北野司久他1名: in vitro における制癌剤スクリーニングテスト法, 第35回日本癌学会総会 (51.10)

池田貞雄, 松原義人他1名: 肺癌組織中の腫瘍特異抗原の検索——抗原の性状と抗原刺激によるリンパ球の幼若化反応, 同上 (51.10)

松原義人, 池田貞雄: 肺癌患者における CEA 測定, 同上 (51.10)

中田利一, 光岡明夫, 伊藤元彦: ビール酵母細胞壁成分のマウス腫瘍に対する作用, 同上 (51.10)

大郷勝三, 倉田昌彦他2名: ヒト乳癌のエストロゲン, プロジェストロン, プロラクチンレセプターについて, 同上 (51.10)

長瀬千秋, 高島義光, 伊藤元彦, 寺松 孝, 北野司久: 肺癌培養細胞を用いる制癌剤感受性検査法, 第17回日本肺癌学会総会 (51.10)

北野司久, 弘野慶次郎, 宮林美福, 市谷迪雌, 光岡明夫, 長瀬千秋: 人肺癌に於ける TAA 並びに Nu マウスへの Transplantability の検討, 同上 (51.10)

池上佳典, 倉田昌彦他5名: 肺癌にみられた重複癌の3症例, 同上 (51.10)

伊藤元彦, 長瀬千秋, 高島義光, 安倍隆二, 寺松 孝: 進行肺癌に対する“非根治的”切除の意義, 同上 (51.10)

人見滋樹, 玉田二郎, 船津武志, 寺松孝, 山本博昭, 伊藤元彦, 安倍隆二, 清水慶彦, 松本守海, 長瀬千秋:

肺癌に対する縦隔鏡検査の手技の検討, 掛川, 高橋らの方法の肺癌への応用——とくに気管後部, 気管分岐部下部リンパ節の生検について, 同上 (51.10)

福田治男, 伊藤元彦: アミラーゼ産生肺癌の発生母地に関する免疫組織学的研究, 同上 (51.10)

佐藤新太郎, 安淵義男: 肺結核治療中に発生した肺の扁平上皮癌, 同上 (51.10)

長瀬千秋, 北野司久: マイクロプレートを用いる制癌剤感受性検査法(第2報)——肺癌培養細胞に対する制癌剤の増殖阻止効果の検討——第9回制癌剤適応研究会 (51.10)

福田治男, 伊藤元彦: アミラーゼ産生肺癌の研究, functioning tumor 研究会 (51.10)

佐藤新太郎, 安淵義男他4名: 肺癌と肺結核の鑑別診断について, 国立病院, 療養所医学会 (51.10)

桑原正喜, 池田貞雄, 松原義人, 滝 俊彦, 船津武志, 甲斐隆義他3名: 肺癌に対する心臓合併切除後の硬膜による欠損部の修復, 第120回近畿外科学会 (51.11)

青木 稔, 長瀬千秋, 伊藤元彦: 胸壁腫瘍自験例の検討, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

立石昭三, 清水慶彦他6名: 気管腫瘍に対する気管切除——気管切除, 端々吻合術後の減張方法としてのツタンカーメンギブスベッドの応用, 同上 (51.11)

船津武志, 人見滋樹: 肺癌における縦隔リンパ節転移と予後, 厚生省班会議 (51.11)

人見滋樹, 船津武志: 縦隔腫瘍に対する胸腔造影と胸腔鏡検査および組織学的検索, 同上 (51.11)

人見滋樹, 玉田二郎, 伊藤元彦, 寺松 孝: High risk group の肺癌集団検診の検討, 厚生省班会議 (51.11)

伊藤元彦, 寺松 孝: 51年早期肺癌2例の報告, 同上 (51.11)

伊藤元彦: 呼吸器の細胞診, スライドカンファレンス出題, 大阪細胞診研究会 (51.11)

伊藤元彦: 肺癌臨床における最近のトピックス, 京阪神呼吸器談話会 (51.11)

松本守海, 伊藤元彦, 寺松 孝: 肺癌患者における尿中 DHA-S の意義, 厚生省班会議 (51.11)

岡田慶夫, 伊藤元彦: 気管支腺の構造, 気道分泌研究会 (51.12)

長瀬千秋: 肺癌培養細胞を用いての制癌剤感受性検査の試みとその肺癌化学療法への応用, 第28回国立大学付置研究所談話会 (51.12)

2. 胸腺・免疫

光岡明夫, 森川 茂, 安平公夫: Cyclophosphamide の遅延型アレルギーに及ぼす影響——その免疫病理学的研究, 文部省科研「細胞性免疫」班会議 (51.1)

光岡明夫, 森川 茂, 馬場満男, 安平公夫: Cyclophosphamide の遅延型アレルギーに及ぼす影響の免疫病理学的研究, 第65回日本病理学会総会 (51.5)

倉田昌彦, 松谷之義, 和田洋己, 山本博昭他5名: 重症筋無力症における胸腺摘出の効果: 第19回日本胸部外科学会関西地方会 (51.6)

光岡明夫, 森川 茂, 安平公夫: Cyclophosphamide による遅延型アレルギー増強機構の細胞学的解析, 文部省科研「免疫応答を調節するアジュバントに関する基礎的研究」班会議 (51.10)

寺松 孝: 胸腺の外科, シンポジウム司会, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.10)

伊藤元彦: 同上シンポジウム「胸腺液性因子の観点から」, 同上 (51.10)

倉田昌彦, 松谷之義, 和田洋己, 山本博昭他5名: 重症筋無力症における胸腺摘出の効果, 同上 (51.10)

松谷之義: 重症筋無力症の外科療法——病理所見と手術成績——第25回共済医学会総会 (51.10)

松谷之義, 山本博昭, 寺松 孝: 異所性胸腺の検索, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

前里和夫, 渡部 智, 長瀬千秋, 安倍隆二, 伊藤元彦: 胸腺嚢腫の8例, 同上 (51.11)

光岡明夫, 寺松 孝, 富山俊一, 馬場満男, 森川 茂: 羊赤血球に対するマウス遅延型過敏症の調節機構Ⅱ, 細胞移入による検討, 第6回日本免疫学会総会, ワークショップ「細胞性免疫のパラメーター」 (51.12)

湊 長博, 桂 義元, 和田洋己他: Vesicular stomatitis virus による遅延型過敏症の増強, 同上 (51.12)

松村理司, 山里有男, 中納誠也, 井上律子, 小林君美: 国療岐阜病院で経験した胸腺腫13例の検討, 第81回岐阜県外科集談会 (51.3)

島本光臣, 秋山文弥: 心不全を主徴とした胸腺腫の1例, 第30回日本胸部疾患学会東海地方会 (51.11)

3. 結 核

山本博昭：肺結核外科的療法の現状からみた空洞形成術の意義，京大胸部研講演会（51.1）

高島義光，渡部 智，長瀬千秋，松本守海，清水慶彦，安倍隆二，伊藤元彦，山本博昭，寺松 孝，久世久幸，前川暢夫：肺の非定型抗酸菌症に対する外科療法，第19回近畿外科学会（51.3）

岡田英彦，倉田昌彦他1名：乳線結核の2例，第19回日本胸部外科学会関西地方会（51.6）

山本博昭，松谷之義，寺松 孝：空洞形成術の成績，とくに不成功例の検討を中心に，同上（51.6）

松谷之義，山本博昭，寺松 孝：空洞形成術73例の成績，とくに再手術で切除した施術部の組織学的所見，第51回日本結核病学会総会（51.6）

長瀬千秋：気管支内結核腫の1例，第5回近畿気管支鏡懇話会（51.8）

松谷之義：空洞形成術の成績——病理組織学的検討——第25回共済医学会総会（51.10）

Yamamoto H. and Teramatsu T.: Surgical treatment of non-tuberculous cavitary lesions by the technique of cavernoplasty, IIIrd Congress Association of Thoracic and Cardiovascular Surgeons of Asia, Sydney (1976. 10)

山本博昭，松谷之義，渡部 智，長瀬千秋，松本守海，清水慶彦，安倍隆二，伊藤元彦，寺松 孝：非結核性空洞病変における空洞形成術，第29回日本胸部外科学会総会（51.10）

浜本康平，立石昭三他4名：気管支結核症例の検討——鑑別診断，臨床経過を中心に——第42回日本結核病学会近畿地方会（51.11）

宮本好博，土谷利晴，伊藤元彦，長瀬千秋，松本守海，清水慶彦，安倍隆二，寺松孝，江部康二，前川暢夫：気管支結核に対する気管支形成の1例，同上（51.11）

井上律子，小林君美，中納誠也，山里有男，松村理司：骨膜外「ボ」充填術後の膿胸の1治験例，第48回結核病学会東海地方学会（51.11）

4. 人工材料

清水慶彦，安倍隆二，寺松孝他2名：移植牛コラーゲンの生体内同化機序に関する実験的研究，第12回日本移植学会総会（51.10）

清水慶彦，安倍隆二，寺松 孝他2名：高度組織親和性を有する複合高分子材料に関する実験的ならびに臨床的研究，第3報コラーゲン合成高分子複合体の生体との結合様式および結合力と長期成績について，第14回日本人工臓器学会大会（51.11）

寺松 孝：コラーゲン合成高分子複合体の組織親和性について，文部省科研費，班会議（51.11）

日野常稔，寺松 孝他1名：可溶性コラーゲンによる医用高分子材料の表面処理，第6回医用高分子シンポジウム（51.11）

5. 心・血管

田村康一，秋山文弥他：高令者にみられた巨大非破裂バレーサルバ洞動脈瘤の1例，第99回静岡県外科医会集談会（51.3）

中路忠司，伊東政敏他3名：興味ある総肺静脈還流異常症の1例，第19回日本胸部外科学会関西地方会（51.6）

勝田宏重，伊東政敏他3名：人工心肺内への抗生剤投与の経験，同上（51.6）

島本光臣，秋山文弥：人工ペースメーカー植込み9年間の成績，同上（51.6）

加藤弘文，秋山文弥：シンポジウム“虚血心疾患の外科療法”第100回静岡県外科医会集談会（51.6）

永尾正男，秋山文弥他：未破裂 Valsalva 洞動脈瘤の1例，第41回日本循環器学会東海地方会（51.6）

和田泰三，倉田昌彦他8名：異型狭心症の5例，第41回日本循環器学会近畿地方会（51.6）

茂幾俊武，伊東政敏他3名：術前1週間レスピレーターを要した VSD+PDA+PH の根治成功例，日本循環器学会中国四国地方会第31回総会（51.9）

伊東政敏他4名：肺高血圧を有する先天性心疾患の手術経験，同上（51.9）

坂東義清，伊東政敏他3名：肺高血圧を合併した先天性心疾患の肺組織所見について，第71回岡山外科会（51.11）

永尾正男, 秋山文弥他: 冠動脈造影像からみた種々薬剤に対する冠動脈の太い部分の反応, 第42回日本循環器学会東海地方会 (51.11)

田村康一, 秋山文弥: 僧帽弁膜症の UCG 診断——90例の手術所見との対比——同上 (51.11)

中納誠也, 小林君美, 井上律子, 山里有男, 松村理司: 右室二腔症10例の検討, 同上 (51.11)

佐々木功, 秋山文弥他: 高血圧性脳症で緊急入院した大動脈縮窄症の1例, 第47回日本小児科学会静岡地方会 (51.11)

玉田二郎, 人見滋樹: 腕頭動脈蛇行症の2例, 鑑別診断を中心に, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

渡辺昌裕, 倉田昌彦他5名: 肥大型心筋症にペースメーカーを植込んだ1症例, 第42回日本循環器学会近畿地方会 (51.12)

中納誠也, 小林君美, 井上律子, 山里有男, 松村理司: 上行大動脈にみられた大動脈縮窄症の1例, 第83回岐阜外科集談会 (51.9)

6. 一般胸部疾患

松原義人: 気管支内出血に対する気管支鏡検査, 第4回近畿気管支鏡懇話会 (51.1)

北野司久, 弘野慶次郎, 宮林美福, 市谷迪雄: 自然気胸を伴った multiple hamartoma の1治験例, 第24回肺癌学会関西支部会 (51.2)

清水慶彦: 術後呼吸管理について, 第21回京滋頭頸部腫瘍談話会 (51.3)

田中一穂, 伊東政敏他3名: 繰返す右肺中葉感染を呈した1例, 第7回岡山胸部疾患懇話会 (51.3)

人見滋樹: 肺, 胸膜生検の最近の知見, 第17回大阪呼吸器疾患懇話会シンポジウム (51.4)

渡部智, 長瀬千秋, 松本守海, 清水慶彦, 安倍隆二, 伊藤元彦, 山本博昭, 佐藤公彦, 加藤幹夫: 食道平滑筋腫の3例, 第119回近畿外科学会 (51.5)

松原義人, 池田貞雄, 滝 俊彦, 福田治男, 船津武志, 甲斐隆義他2名: 胸壁欠損に対する乾燥硬膜の使用経験, 同上 (51.5)

中納誠也, 小林君美, 井上律子, 山里有男, 松村理司: 非結核性, 非癌性肺疾患に対する縦隔鏡の応用価値について, 第29回胸部疾患学会東海地方会 (51.5)

立石昭三他: 当院における気管切開症例——とくに気管内挿管から気管切開までの期間についての臨床的検討, 第19回日本胸部外科学会関西地方会 (51.6)

二ツ矢義一, 滝俊彦, 福田治男, 松原義人, 池田貞雄, 甲斐隆義, 船津武志他1名: 自然気胸に対する外科的治療——parietal pleurectomy の併用について, 同上 (51.6)

松原義人, 池田貞雄, 桑原正喜, 滝 俊彦, 福田治男, 船津武志, 甲斐隆義他2名: 膿胸治療における我々の試み——人乾燥硬膜による胸壁の修復について, 同上 (51.6)

松村理司, 山里有男, 中納誠也, 井上律子, 小林君美: 縦隔奇形腫9例の検討, 同上 (51.6)

玉田二郎, 人見滋樹, 寺松 孝: 腎障害からみた肺化膿症の治療方針, 同上 (51.6)

田中一穂, 伊東政敏他3名: 胸壁血管腫の1例, 第70回岡山外科会 (51.6)

高島義光, 渡部 智, 長瀬千秋, 松本守海, 清水慶彦, 安倍隆二, 伊藤元彦, 山本博昭, 寺松 孝他1名: 肺分画症4例の経験, 同上 (51.6)

滝 俊彦, 福田治男, 松原義人, 甲斐隆義, 池田貞雄, 船津武志他1名: 両側性気管支拡張症の外科的治療, 第16回日本胸部疾患学会総会 (51.6)

長瀬千秋, 松本守海, 清水慶彦, 安倍隆二, 伊藤元彦, 山本博昭, 寺松 孝, 滝俊彦, 福田治男, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄他1名: 自然気胸の成因について——病理組織学的観点から——, 同上 (51.6)

玉田二郎, 人見滋樹: 胸水の凝固線溶系を中心とした胸水貯溜症例の検討, 同上 (51.6)

稲垣 浩, 立石昭三他: 一過性 plasma cytosis を来たし, その後 pancytopenia を認めたウイルス肺炎の1例, 第25回血液学会近畿地方会 (51.6)

二ツ矢義一, 滝 俊彦, 福田治男, 松原義人, 船津武志, 甲斐隆義, 池田貞雄他2名: 胸膜針生検11例の検討,

第25回肺癌学会関西支部会 (51.7)

玉田二郎, 人見滋樹: 肺分画症の輸入動脈と副気管支動脈との鑑別が困難であった右肺形成異常の1症例, 第17回血管心臓造影懇話会 (51.7)

松村理司, 山里有男, 中納誠也, 井上律子, 小林君美: 血胸を合併した自然気胸の2例について, 第12回中部外科学会総会 (51.8)

甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄, 桑原正喜, 滝俊彦, 松原義人他3名: 自然気胸および開胸術後における胸腔内圧測定の意義, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.9)

池田貞雄, 甲斐隆義, 船津武志, 桑原正喜, 滝俊彦, 松原義人他3名: 胸部 prosthesis としての人工乾燥硬膜の応用——とくに膿胸の治療, 同上 (51.9)

玉田二郎, 人見滋樹: 逆流阻止弁, 安全装置付き胸腔持続吸引器の開発(第2報)臨床例の検討, 同上 (51.10)

森本英夫, 倉田昌彦他3名: 腹部透視中に発見し胸腔鏡で診断した肺過誤腫の2例, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

轟 文夫, 久野健志, 中川正清: catamenial pneumothorax (月経性気胸) の1例, 同上 (51.11)

日置辰一郎, 立石昭三他: 縦隔気腫14例の臨床的経験, 同上 (51.11)

二ツ矢義一, 滝 俊彦, 桑原正喜, 松原義人, 船津武志, 甲斐隆義, 池田貞雄他2名: Ramel 針による胸膜生検20例の検討, 同上 (51.11)

二宮和子, 桑原正喜, 滝 俊彦, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄他2名: 胸膜サルコイドーシスの1例, 同上 (51.11)

滝 俊彦, 桑原正喜, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄, 松原義人他3名: リウマチ性肺疾患の2例, 同上 (51.11)

桑原正喜, 滝 俊彦, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄: ハイムリッヒバルブによる自然気胸の治療, 同上 (51.11)

高島義光, 渡部 智, 伊藤元彦: 興味ある組織像を示した食道嚢腫の1例, 同上 (51.11)

宮本茂充, 滝 俊彦, 桑原正喜, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄他3名: 食道平滑筋腫の1例, 第120回近畿外科学会 (51.11)

高島義光, 長瀬千秋, 安倍隆二他1名: 学童ボクダレックヘルニアの2例, 同上 (51.11)

北野司久: 興味ある経過を示した3症例, 奈良県呼吸器疾患研究会 (51.11)

松村理司, 山里有男, 中納誠也, 井上律子, 小林君美他6名: 続発した変化のため診断困難であった縦隔奇形腫3例について, 第29回日本胸部疾患学会東海地方会 (51.5)

松村理司, 山里有男, 中納誠也, 井上律子, 小林君美他6名: 続発した変化のため診断困難であった小児縦隔奇形腫の1例について, 第82回岐阜外科集談会 (51.5)

〔著書並びに誌上発表〕

1. 腫 瘍

轟 文夫, 人見滋樹分担執筆: 肺門部早期肺癌図譜, 医学書院, 1976.

松原義人, 池田貞雄, 今村正之: 肺癌患者における Carcinoembryonic antigen (CEA) 値の測定, 日本胸部臨床 35; 587, 1976.

長瀬千秋, 伊藤元彦, 北野司久, 笹田昌孝, 中村 徹: マイクロプレートを用いる制癌剤感受性検査法——マイクロコロニー形成阻止試験による制癌効果の判定, 最新医学 31; 1611, 1976.

轟 文夫: MNNG による家兎気管支癌の実験的発生, 肺癌 16, 321, 1976.

人見滋樹: 肺癌根治のための集団検診は如何にあるべきか, 大阪府医師会医学雑誌, 10, 1, (13), 145, 1975.

丸山 泉, 人見滋樹, 玉田二郎他4名: 肺転移巣の自然治癒をみた腎癌の1例, 関西電力病院医学雑誌 8; 45, 1976.

安倍隆二, 寺松 孝: 気管・気管支腺腫の診断および治療, 臨牀と研究 53; 2317, 1976.

2. 胸腺, 免疫

寺松 孝, 和田洋己: 現代外科学大系年刊追補 1976-D. 外科からみた胸腺の機能, 中山書店, 1976.

寺松 孝, 山本博昭, 伊藤元彦: 縦隔腫瘍に関する全国集計——第1篇縦隔腫瘍全国集計, 日本胸部外科学会雑誌 24; 264, 1976.

寺松孝, 山本博昭, 松谷之義: 縦隔腫瘍に関する全国集計——第2篇胸腺腫の臨床に関する全国集計, 同上 24; 270, 1976.

馬場満男, 森川 茂, 原田孝之, 光岡明夫: マウスにおける遅延型アレルギー反応出現における遺伝的背景, 臨床免疫 8; 571, 1975.

Mitsuoka, A. Baba, M. and Morikawa, S.: Enhancement of delayed hypersensitivity by depletion of suppressor T-cell with cyclophosphamide in mice, *Nature* 262 (5563): 77, 1975.

3. 結 核

寺松 孝, 中西通泰: 結核の治療法の変遷, 日本医事新報 2736, 3, 1976.

Yamamoto H., Matsutani Y. and Teramatsu T.: Surgical treatment for pulmonary tuberculosis at the present stage of advancement in chemotherapy. *Jap. J. Tuberc. Chest. Dis.* 20: 39, 1976.

4. 人工材料

清水慶彦, 寺松 孝, 安倍隆二, 石原浩, 上野陽一郎他3名: コラーゲン合成高分子複合体の研究——層状複合体の組織親和性について——, 人工臓器 4; 349, 1975.

5. 心・血管

当山真人, 秋山文弥他: 器質的狭窄を伴う異型狭心症に対する Bypass grafting+Adventitial stripping の効果, 胸部外科 29; 769, 1976.

泰江弘文, 秋山文弥: 安静狭心症——種々薬剤に対する反応からみた病態と治療——最新医学 31; 2201, 1976.

Yasue H., Akiyama F. et al.: Prinzmetal's variant form angina as a manifestation of α -adrenergic receptor-mediated coronary artery spasm: Documentation by coronary arteriography. *Amer. Heart J.* 91: 148, 1976.

6. 一般胸部疾患

長石忠三, 池田貞雄, 船津武志, 甲斐隆義, 人見滋樹: 胸部の異常陰影, 改訂2版, 金芳堂, 1976.

人見滋樹, 寺松孝分担執筆: 全身性疾患の肺病変, 内視鏡検査, 世界保健通信社, 1976.

山本博昭分担執筆: 同上, 横隔膜疾患 世界保健通信社, 1976.

伊藤元彦, 轟 文夫, 森川 茂: 血管分布からみた肺のいわゆる“硬化性血管腫”の検討, 日本胸部臨床 35; 159, 1976.

立石昭三他: 胸部手術後の植物線維性異物遺残症例, 胸部外科 29: 811, 1976.

立石昭三他: 機能改善を目的とした呼吸器外科——肺剥皮術, 日胸外会誌 24: 456, 1976.

甲斐隆義: 縦隔鏡検査: 日本気管食道科学会会報 27: 219, 1976.

滝 俊彦: 小児気管支腺腫の1例, 日本胸部臨床 35: 837, 1976.

人見滋樹: 胸腔鏡検査と胸腔鏡下肺生検, 日本気管食道学会誌 27: 232, 1976.

人見滋樹, 玉田二郎他1名: 胸腔鏡下肺生検にて確定診断がえられたびまん性肺疾患の3症例の検討, 関西電力病院医学雑誌 8: 9, 1976.

人見滋樹: 胸部レントゲン写真読影の着眼点 (5), 網目状陰影, 同上 8: 63, 1976.

Hatakenaka R., Ikeda S., Hitomi S., Funatsu T., and Nagaishi C.: A new method of intrathoracic biopsy using thoracoscope and tissue adhesive, *Broncho-Pneumologie* 26: 161, 1976.

病 理 学 部

1. 肉芽研究グループ（安平公夫他）

安平公夫：真菌症と肉芽，真菌と真菌症 17；84-91（1976）——感染症の病巣に精しい病理組織学的検討を加え，膿性巣と肉芽巣とをはっきり区別して，肉芽形成因子を菌の細胞壁成分に求めようとの意図が示されている。

尚一昨年来進行してきた医学書院発行“炎症学叢書”全7巻が本年初頭完成の予定であって，編集者の一人として安平はこの叢書の完成に努力してきた。本叢書中，我々の研究室の貢献した項目は以下の通りである。

第3巻 慢性炎症と免疫 第1章 感染症と免疫（安平）

〃 慢性炎症と免疫 第5章 慢性炎症と間質Ⅲ（竹田，安平）

第4巻 炎症動物実験法 第3章 足浮腫Ⅱ（森川）

第6巻 臓器炎とその疾患モデル 第2章 アレルギー性臓器炎の実験の進歩（安平）

2. 結合組織研究グループ（竹田俊男他）

竹田助教授を囲むグループで，医員として活躍した C. S. Yao はカナダ，トロント大学に転職，臨床病理の専門家のコースを歩んでいる。他に山室隆夫講師（近大整形外科教授）に連る浜弘道（目下イギリス留学中），真田浩幸，四方実彦，更に本学皮膚科井上邦雄，同整形外科浜本肇，本研究所周肺生理部門佐藤公彦，内I部門細川昌則等の医員，また大学院生小笹宏等の諸君が，それぞれに時間を作って，竹田の指導下に実験を行っている。研究内容の概要は次の通りである。

従来マウス各臓器，組織におけるコラーゲン形成の加齢および性による変化を研究するなかで，各種臓器結合組織—線維芽細胞には，そのホルモン反応性からみて，臓器特異性が存在し，皮膚型，腸間膜型，副性器型，実質臓器（肺，肝）型に大きく類型化されることを明かにしてきた。

本年度の実験では，関節包結合組織は皮膚型に属すること，および骨結合組織は上記のいずれにも属さない新しい型であることが明らかとなった。また股関節脱臼の実験的研究により，性ステロイドとくにエストロゲンが，先天性股関節脱臼症の発症に重要な役割を果していることが確認された。

現在，弾力線維もふくめ線維性蛋白の形成成熟の基本的な調節機構あるいは，これらに關与する間葉系細胞の役割等について基礎的な実験を行っている。

発表してきた本年度の業績のうち，学会発表を省略して，誌上発表の題目のみを掲載すれば次のようである。

〔誌 上 発 表〕

Hama, H., Yamamuro, T. and Takeda, T.: Experimental studies on connective tissue of the capsular ligament-Influences of aging and sex hormones. Acta Orthop. Scand, 579(5): 1, 1976.

山室隆夫，浜弘道，四方実彦，真田浩幸，竹田俊男：実験的股関節包内脱臼の組織学的所見，中部整災誌，19(4)：1976.

岡 正典，山室隆夫，浜 弘道，四方実彦，真田浩幸：成長軟骨帯の力学的強度に及ぼす性ホルモンの影響，中部整災誌，19(4)：1976.

川浪進，深瀬 宏，真田浩幸，笹井実人，伊藤元彦，竹田俊男：悪性腫瘍と誤診した胸椎カリエスの1例，整形外科，27(10)：955，1976.

真田浩幸，四方実彦，山室隆夫，浜 弘道，竹田俊男：性ステロイドホルモンの骨に及ぼす影響について，整形外科基礎科学，3(骨，軟骨代謝の生理と病態)：303，1976.

岡 正典，山室隆夫，浜 弘道，四方実彦，真田浩幸，竹田俊男：成長軟骨帯の力学的強度に対する性ホルモンの影響，整形外科基礎科学，3(骨，軟骨代謝の生理と病態)：101，1976.

3. 免疫グループ（森川 茂，原田孝之，馬場満男，富山俊一，金沢 進，安平公夫，他）

グループの指導者は森川講師で，51年4月島根医大病理学教授就任後も，尚非常勤講師として後輩の指導に当

っている。研究所医員であった原田は、Rosewell Park Memorial Institute での留学生活 2 年余を経て、本年 3 月末帰国予定。現在の医員は馬場、富山の 2 人。金沢は研修員。他に医学部内 1 の大学院生巽英二、研究所胸部外科大学院生光岡明夫、医学部第 2 外科医員藤村昌樹、陳世沢の諸氏がこのグループに参加し、それぞれに実験を行っている。

研究の第 1 は細胞性免疫を調節する免疫細胞に関するものであって、細胞性免疫にもその抑制を営む Suppressor T があって、その働きをマウスの足蹠反応によって明らかにした森川らの発見は、その重要部分が間もなく J. Exp. Med. 誌上に現われる予定である。また一方では光岡を中心に、遅延型アレルギーに対する Cyclophosphamide 効果の研究が行われ、その要旨は Nature に掲載された。学会発表としては次のものが挙げられる。

光岡、森川、安平：細胞性免疫の組織表現(Ⅲ)遅延型アレルギーに及ぼす Cyclophosphamide の影響——その免疫病理学的研究、文部省科学研究費、総合研究森川班(班員 安平)研究発表会(1976.1.31), Minophagen Rev. 21: 257-262 (1976)

光岡、森川、馬場、安平：Cyclophosphamide の遅延型アレルギーに及ぼす影響の免疫病理学的研究、第65回日本病理学会総会(51.5)

光岡、森川、安平：Cyclophosphamide による遅延型アレルギー増強機構の細胞学的解析、文部省科学研究費、免疫特定、小谷班(免疫強化に関する研究、班員安平)、51年度第 1 回班会議報告(1976.10)

森川、鈴木、馬場、原田、富山：化学修飾抗原感作マウスでの細胞性免疫に関与する 2 種の抗原反応性 T 細胞とその特異性、第 6 回日本免疫学会総会 Workshop V. (1976. 12)

光岡、寺松、富山、馬場、森川：半赤血球に対するマウス遅延型過敏症の調節機構Ⅱ細胞移入による検討、第 6 回日本免疫学会総会 Workshop V. (1976. 12)

研究の他の重要部分は人癌培養細胞系の樹立とその癌特異抗原に関する研究である。現在15種を越す各種の癌細胞系が得られているが、そのうち特異なものは、T細胞由来と目される HPB-ALL と HPB-MLT の 2 系であって、T系の培養細胞は簗和田氏の有する R. P. M. I. の 4 系に加へ、世界で 6 系ということになる。Morikawa, S. et al.: Two E-rosette forming lymphoid cell-lines として現在論文が用意されている。この輝かしい業績に加えて、森川、陳らは培養癌細胞が CEA 様特異抗原を保有し、これを抗原とすれば蛍光抗体法によって患者血清中の抗原体様物質を同定出来ることを発見した。その第 1 報は1976年初頭に現われたが、これを臨床癌診断に利用すべく、その基礎的研究が行われ、この研究に対しては文部省科学研究費試験研究として研究費が支給された。本項に関する研究発表には次の如きものがある。

森川、原田、馬場、安平、巽、堂前：ヒト T-リンパ球性白血病細胞由来細胞株 2 株の樹立とその細胞学性状、第65回日本病理学会総会(1965.5)

戸部、陳、森川、安平：ヒト胃癌由来培養細胞における膜特異抗原、第 4 回日本臨床免疫学会総会(1976.7)

森川、巽、池田、原田、馬場、安平：人癌培養細胞株における腫瘍特異抗原の検索、第35回日本癌学会総会(1976.10)

森川、巽、原田、馬場、安平：ヒト胃癌培養細胞株 3 株の樹立とその細胞学的性状、第35回日本癌学会総会(1976.10)

森川、巽、陳、藤村、戸部、富山、安平：癌特異抗原保有人癌培養細胞株による癌診断の試み、第35回日本癌学会総会(1976.10)

4. 化学発癌グループ(高橋権也、木下和之、安平公夫)

従来当研究室においては、永野、安平のコンビに始まる肺癌の実験発生の研究が行なわれ、高橋、安平と引き継がれて、最近では高橋助手を中心に、各種発癌剤の臓器分布及びその代謝の研究が行なわれている。この方面で現在までに発表した学術講演約50である。高橋助手は、従来マクロオートラジオグラフを世界で始めて化学発癌の領域に導入し、代謝物質のクロマトによる分析と併せて、この方面での独自の領域を開拓することに成功し、その成績は Cancer Res. への掲載 5 篇、Gann への掲載 6 篇等を数えている。この研究に対しては本年度文部省科学研究費がん特別Ⅱが与えられた他に、高橋助手は文部省科学費がん特別、田中班(発癌物質の胎仔に対する

影響)の班員として、化学発癌剤の胎仔移行、胎仔中での分布と代謝の問題をめぐって活発な研究を行ない、研究班の重要メンバーと目されている。

尚高橋助手は米国フィラデルフィア市、テンプル大学医学部、フェルス研究所長 Dr. S. Weinhouse の招きに応じ、1970.6~1972.6の間、ラット肝を灌流し、これによって 3-MC の代謝を研究した。之来 3-MC の如き脂溶性の強い物質の代謝を灌流肝で行うことは困難視されていたのであるが、高橋助手は種々改良を加え、この研究に成功した。この見事な実験は本年初頭の Cancer Res. を飾る予定である。

尚これらの研究に関連し、高橋助手は1977年1月末米国ニューオルリーonzにて開催される日米医学、化学発癌に関する討議会にスピーカーとして招待され、報告を行うことになっている。

〔学会発表・誌上発表〕

安平公夫：発癌物質の胎仔への移行と代謝，文部省科学研究，がん特別50年度研究報告集録 p. 376, 1976

高橋権也，H. Shah, S. Weinhouse: ラット還流肝における 3-MC の代謝，第35回日本癌学会総会 (51.10)

高橋権也：癌原性炭化水素による発癌機構の解明にむけて，京大胸部研談話会第1回 (51.10)

安平公夫，高橋権也：発癌物質の胎仔への移行と代謝，文部省科学研究費がん特別田中班（発癌物質の胎仔に対する影響）51年度第2回班会議 (1957.1)

Takahashi, or., Shah, H. and Weinhouse, S.: Metabnlis of 3H-3-methyl cholanthrene in the peryused rat liver. Proceeding' of the 67th annual raectiny of the American Association lor Canche Research 214, 1976.

5. 肺表面活性物質研究グループ（鈴木康弘，田畑良宏）

肺表面活性物質の主成分は dipalmitoyllecithin であることが明らかにされ、現在その他の成分である cholesterol などの脂質および蛋白成分などに関する研究が行われつつある。我々は特に aging, 実験的脂質代謝異常における肺表面活性物質中の各種脂質の質的、量的変化と界面活性との関連について検索し報告を行った。今後の方向として、FGC-MS による気液界面分子膜自体の組成解析と表面活性との関連性を検索し、各脂質成分の機能を明らかにする。

〔学 会 報 告〕

鈴木康弘，田畑良宏：新生児発育に関する基礎的研究——特に terminal air space と肺表面活性物質の年令的变化について，第51回日本病理学会総会 (51.5.20)

鈴木康弘，田畑良宏：肺表面活性物質におよぼす D-galactosamine の影響，第21回未熟児新生児研究会(51.11)

鈴木康弘，田畑良宏：D-galactosamine HCl による ラット肺表面活性物質 への影響，第3回日本界面医学会 (51.12)

鈴木康弘：脂質代謝異常と肺表面活性物質，第1回シンポジウム「肺の微細胞構造と機能」 (51.12)

6. 臨床病理組織学的検査（馬場満男，富山俊一，木下和之，山根すま子）

馬場，富山，木下3医員の働きを病理部門一同で支えて検査の万全を期している。試験切除標本，気管支鏡擦過物，喀痰等の検査が主力で，剖検は少い。ちなみに剖検数を挙げれば47年13例，48年7例，49年10例，50年10例等，略年間10例を前後する程度である。山根技官の技術も向上してきたので，更に臨床に貢献し，臨床研究の端緒ともなるものであるよう，今後とも努力したい。尚胸部外科部門伊藤元彦氏は，剝離細胞診に関する顧問として重要な役目を果してきた。其他長瀬千秋，北市正則氏らのように，病理診断に積極的協力を行っている臨床各部の医員もある。

7. 実験介助グループ（松下降寿，小池久美子，奥村由美子，門田一美，安岡倉一，飛田 勇，近藤照子）

松下技官は衛生検査技師，臨床検査技師の資格に加えて，2級臨床病理技術士の試験に合格，小池，奥村技能補佐員は，それぞれ東京で開催されたコラーゲン講習会，染色体講習会に出席，それぞれに学門的技術において一段の進歩を加えた。また実験病理を標榜するこの部門にとって，実験動物はその命とも言うべきものであるが，門田，安岡，飛田，近藤両氏協力のもとに動物管理が次第に向上していることは喜ばしい。

〔主要論文抄録〕

森川，巽，池田，松原，原田，馬場，安平：人癌培養細胞株における腫瘍特異抗原の研究，第35回日本癌学会総会（1976.10.5）

京都桂病院胸部外科免疫グループとの協力研究である。従来教室で樹立され，維持されてきた人の上皮性腫瘍細胞6系。そのうち5株において MIF-test 陽性（即ちこれらの細胞は癌患者血清の IgG に対する receptor を有す）であったが，これらの陽性細胞は何れも，その培地中に CEA（ダイナボット社 I-R キットによる測定）を産生し，また池田らの作成した TS 抗原（肺癌特異抗原）に対する兔抗血清による MIF-test も陽性である。培養細胞の継代の長期化と共に，この種の抗原の保持は次第に困難であると見放されているが，上記我々の樹立し得た細胞株では1972年11月樹立の胃線癌以来，総ての細胞株で尚抗原が保持されている。血清中の反応物の本態に就ての検討が行われ，患者血清の IgG のみが有効（他に妊婦血清）であると判明している。

Mitsuoka, A., Baba, M. & Morikawa, S.: Enhancement of delayed hypersensitivity by depletion of suppressor T-cells with cyclophosphamide in mice, *Nature* 262 (5563): 77-78, 1976.

先に森川らは遅延型反応の出現をコントロールする細胞の一つとして Suppressor T-cell なるものを提唱し，これが Short-lived T に属するものであることを明らかにした。一方最近 cyclophosphamide が遅延型反応を促進する事実が注目され，その促進の機構について徐々に研究が進められているところであるが，光岡らは methyl 化した人血清アルブミン (MHSA) によるマウスの感作に際し，爾后において cyclophosphamide の比較的大量投与が MHSA による遅延型皮膚反応を明瞭に促進する事実を発見し，更にこの反応促進効果は正常胸腺細胞の移入で減弱されること，また感作後の薬剤投与は逆に反応を減弱させること等により，遅延型反応は，反応に参加する effector T-cell と suppressor T-cell との競合によって反応の度が決るものであることを明らかにした。

真田浩幸，四方実彦，山室隆夫，浜 弘道，竹田俊男：性ステロイドホルモンの骨に及ぼす影響について，整形外科基礎科学 3. 「骨軟骨代謝の生理と病態」303～307，昭和51年

今回私達はマウスを用い，その aging において骨に現れる雌雄差と各種ステロイドホルモンの骨に及ぼす影響をしらべ，以下のような興味ある知見を得た。① 正常 DDD マウスでは5～12週にて腸骨，大腿骨には性差が明らかとなって雌が雄よりも多量の collagen, calcium を含むようになり，生後47週まではこの状態が持続する。脛骨では前二者程性差が著明ではな近。② Estradiol benzoate は骨の collagen, calcium 共に増加させ，progesterone は雌の collagen は増やすが calcium 量には変化を与えない。testosterone は両者共に変化を起させない。なお estradiol benzoate の効果は脛骨に比して腸骨，大腿骨に強く現われる。③ 以上の事実より，性ステロイドホルモン特に estrogen, progesteron は骨の代謝にお近て，生理的に重要な役割を演じていることが強く示唆されるとともに，hormone responsiveness という点からみて，各骨の間に，あるいは雌雄の間にちがいはあることは，非常に興味深い事実と考える。

細胞化学部

〔学会発表〕

Hirai, K-I., Witschi, H. and Cote, M. G.: Electron microscopy of BHT-induced lung damage. Fifteenth Annual Meeting, Society of Toxicology, Atlanta, Georgia, March 14-18, 1976.

Hirai, K-I., Yamauchi, M., Witschi, H. and Cote, M. G.: Ultrastructural evidence of transformation of alveolar type II cells to type I epithelium in butylated hydroxytoluene-treated mouse lung. The First International Congress on Cell Biology, Boston, Massachusetts, September 5-10, 1976.

堀内正宏, 市川康夫, 前田道之: マウス骨髓性白血病細胞の増殖と分化, 第6報比較としての正常白血球の場合。特に腹膜より得られる CSF について, 第35回日本癌学会総会 (51.10)

市川康夫: 骨髓性白血病細胞の多分化能, 第35回日本癌学会総会シンポジウム (51.10)

Yodoi, J., Masuda, T., Maeda, M. and Ichikawa, Y.: Effect of cultured macrophages derived from an established cell line (M1) on antibody formation in vitro. 第35回日本癌学会総会 (51.10)

大川欣一: 2,5-Fluorenediamine によるカタラーゼの新しい細胞化学的証明法の研究, 第65回日本病理学会総会 (51)

大川欣一: 2,7-Fluorenediamine (2,7-FDA) 及び 2,5-fluorenediamine (2,5-FDA) によるヘモグロビンの新しい細胞化学的証明法の研究。第65回日本病理学会総会 (51.4)

大川欣一, 水谷民夫, 川西正祐: 合成塩化ビフェニール異性体による肝細胞障碑に関する研究 (第二報) 第65回日本病理学会総会 (51.4)

大川欣一, 北市正則: 酸性領域での DAB によるカタラーゼの細胞化学, 第32回日本電子顕微鏡学会総会 (51.4)

Antakly T. W., Tanaka S., Ohkawa K.: Cytochemistry of peroxidase on frozen ultrathin sections. 第17回日本組織細胞化学会 (51.11)

Ohkawa K., Antakly T. W., Tanaka S.: Cytochemical detection of peroxidase using fluorenediamines 5th Internat. Cong. Histochem. Cytochem. (Bucharest, Romania) (1976. 9).

Ohkawa K., Antakly T. W., Tanaka S.: Cytochemical detection of catalase using fluorenediamines 5th Internat. Cong. Histochem. Cytochem. (Bucharest, Romania) (1976. 9).

Ohkawa K., Antakly T. W., Tanaka S.: Cytochemical study on catalase using acid DAB medium. 5th Internat. Cong. Histochem. Cytochem. (Bucharest, Rormania) (1976. 9).

〔誌 上 発 表〕

Hirai, K-I, Yamauchi, M., Witschi, H. and Cote, M. G.: Ultrastructural evidence of transformation of alveolar type II cells to type I epithelium in butylated hydroxytoluene-treated mouse lung. J. Cell Biol. 70; 86a, 1976.

Ichikawa, Y., Maeda, M. and Horiuchi, M.: In vitro differentiation of Rauscher-virus-induced myeloid leukemia cells. Int. J. Cancer. 17; 789-797, 1976.

Nagata, K., Takahashi, E., Saito, M., Ono, J., Kuboyama, M. and Ogasa, K.: Differentiation of a cell line of mouse myeloid leukemia. I. Simultaneous induction of lysosomal enzyme activities and phagocytosis. Exp. Cell Res. 100; 322-328, 1976.

Okuma, M., Ichikawa, Y., Yamashita, S., Kitajima, K. and Numa, S.: Studies on some lipogenic enzymes of cultured myeloid leukemic cells. Blood 47; 439-446, 1976.

Inagaki, A., Uno, S., Yoneda, M. and Ohkawa, K.: 2,7-Fluorenediamine and 2,5-fluorenediamine as peroxidase reagents for blood smears. J. Lab. Clin. Med. 88; 334-338, 1976.

Ohkawa, K., Antakly, T. W., Tanaka, S., and Sugai, N.: New techniques for cytochemical localization of exogenous peroxidase activity with 2,7-fluorenediamine and 2,5-fluorenediamine as hydrogen donors. Annal. Histochem. 21; 365-375, 1976.

Ohkawa, K., Antakly, T. W., and Tanaka, S.: Cytochemical detection of peroxidase using fluorenediamines Proc. 5th Internat. Cong. Histochem. Cytochem. (Bucharest, Romania) 256, 1976.

Ohkawa, K., Antakly, T. W., and Tanaka, S.: Cytochemical detection of catalase using fluorenediamines. Proc. 5th Internat. Cong. Histochem. Cytochem. (Bucharest, Romania) 257, 1976.

Ohkawa, K., Antakly, T. W., and Tanaka, S.: Cytochemical study on catalase using acid DAB medium. Proc. 5th Internat. Cong. Histochem. Cytochem. (Bucharest, Romania) 257, 1976.

平井は昭和50年1月より昭和51年9月までの期間、カナダ国モントリオール大学薬理学教室へ研究員として派遣され、その間以下の業績を挙げた。(1)食品添加剤の一種の脂肪酸化防止剤であるブチル水酸化トルエン(BHT)をマウス腹腔へ投与すると、肺胞上皮のⅠ型細胞が特異的に障害壊死に陥るが、これに伴ってⅡ型上皮細胞が増殖肥厚して来る。後者の一部は更にⅠ型細胞にメタプラジアをおこして、肺胞上皮系の再生がみられた。この際、Ⅱ型細胞にあったペルオキシゾームが消失してゆく過程が電顕酵素化学的に追跡された。(2)除草剤パラコートは肺障害をおこして、出血・肺水腫、肺繊維症、肺胞蛋白症の原因となるが、この際最初に障害を受けるのはⅡ型細胞であることが明らかになった。

市川、堀内、永田は、前田(ウイルス研)、淀井、増田(共に代謝研)、大熊(内科)、沼(医化学)と協同或は単独に研究を進め以下の所見を得た。(1)骨髓性白血病培養株 M1 が conditioned medium や羊水中の D 因子の作用で分化する際、ライソゾーム酵素の上昇を伴うが、カテプシン・酸性フォスファターゼの上昇が認められるのにも拘らず β グルクロニダーゼは上昇しない。(2)ラウシャールウイルスに因る骨髓性白血病 3 系が新たに培養株となったが、(a)全く D 因子に反応しないもの、(b)好中球へのみ分化するもの、(c)マクロファージへも好中球へも分化するもの、のあることがわかった。更に、(c)はクローニングを重ねてもなお両種細胞が悪の孫に出現することから、分化の方向決定の操作をしらべる材料として将来用いられるだろう。(3)マクロファージに分化した際、感作 B・T 細胞と協同して抗原産生に関与することが明らかにされた。この点からみても、わずか48時間の D 因子との接触によって骨髓性白血病細胞が正常マクロファージと同等の機能を帯びるようになっているわけである。(4)正常血球に対する CSF (colony-stimulating-factor) は従来トリプシン耐性と一般に信ぜられて来たが、そのような粗雑な表現は今後通用せぬことが証明された。CSF 中には、トリプシンで不活化される G 因子と、トリプシン耐性の M 因子が含まれていて、前者は好中球への分化を、後者はマクロファージへの分化を促進する。CSF をトリプシン処理すると、G 因子が不活化された分だけ M 因子の作用が顕著に現れる結果となり、単にコロニー数を算しているだけでは変化が認められない。colony forming cell を好中球の方へ引っ張るか、マクロファージの方へ引っ張るかは、G と M との量的な差に因るらしい。G と M とは分子の大きさの点でも分けられる。作用機構の詳細について検討中。

大川及び共同研究者は peroxidase 及び catalase の細胞化学的反応とその酸化基質の化学構造に関する研究を行い、諸学会で報告した如き成績を得ている。更に続行中である。また、合成 PCB に関する研究では細胞障壁型を①脂肪蓄積型、②セロイド様色素蓄積型、③混合型に分類し、工業用 PCB に所謂油症の細胞障壁の研究には化学構造の明確なものを使用しての実験が必要なことを明らかにした

細菌血清学部

当部門に於ては微生物学ならびに免疫学の二方面から研究を行なっている。

1. 微生物学に関する研究

(1) 発達した放線菌は Prokaryote であるにもかかわらず、栄養菌糸、気菌糸、孢子等に分化した多細胞の集合形態を形成する。Nocardia は放線菌目の内では孢子を産生せず、栄養菌糸、気菌糸も空間的に区別されるのみで、最も未分化な菌属の一つとして形態形成研究の好材料である。我々は両菌糸の化学的、物理的差違、栄養菌糸から気菌糸への分化の機構の解明を行なった。これはまた、Corynebacterium, Mycobacterium から Nocardia を経てより高度な Streptomyces, Micropolyspora 等に至る各菌属の細胞壁表層構造の差異とも関連させることを目的の一つとしている。

(2) 最も簡単な eukaryote である酵母について、主として生理活性と細胞膜の超微細構造の変化とを関連させて研究した。Candida, Cryptococcus 等、通常の(高等な)酵母は細胞膜に細長い invagination を持つが、Mucor 等下等な菌では円い事が見出された。細胞膜のこの invagination の部分は高等な酵母では増殖期と停止期とで

蛋白質の存否という点で顕著な差のあること、また、その生理作用を増殖停止期に持つことを明らかにした。なお、細胞膜蛋白の分布様式が増殖の時期によって異なること、さらにその分布を制御する物質の存在を示唆した。

〔学 会 発 表〕

竹尾漢治：Micropolyspora angiospora の細胞壁表層構造。第32回日本電子顕微鏡学会 (51.5)

竹尾漢治：細胞膜の超微構造と機能 若い生化学者の会“夏の学校”講師 (51.7)

木村加寿子, 竹尾漢治, 上坂一郎：Nocardia の色素産生と fragmentation の酸素欠乏による阻害について、第20回日本医真菌学会総会 (51.10)

山田幸子, 谷嘉男, 竹尾漢治, 福井三郎：Candida tropicalis tk 233 の二形性に関する研究, 第4報菌糸型形成要因について。日本発酵工業会第51年度大会 (51.10)

Takeo, K., Nishiura, M.: Freeze-etching study of peribacillary substance around various mycobacteria. 11th U. S.-Japan Leprosy Research Conference. Tokyo (51.9)

〔誌 上 発 表〕

Takeo, K.: Non-globular shapes of plasma membrane-intercalated particles of yeasts. J. Electron Microscopy 25; 107-109. 1976.

Takeo, K., Nonaka, T., Ikeda, T.: Freeze-etching observation of alteration of *Rhizopus sporangiospores*, especially the cellular envelope during maturation. Cell Structure and Function 1: 259-267, 1976.

Takeo, K.: Orderly crystallization of plasma membrane lipids of *Micropolyspora angiospora* as revealed by freeze-etching. Micron: Intern. J. Electron Microscopy, Electron Probe Microanalysis and Associated Techniques 7: 231-236, 1976.

Nagai, S., Kasahara, H., Nishimura, K., Takeo, K.: Toxic effect of blasticidin S on yeasts and its prospective use for early warning of contamination in fermentation processes. 5th Intern. Fermentation Symposium p. 3471. 1976 (Berlin)

竹尾漢治, 上坂一郎：Cellular envelope からみた各種病原性 Actinomycetales の特徴, 真菌と真菌症 17: 112 昭51

竹尾漢治：細菌, 真菌の細胞内膜系における機能形態及び調節に関する研究——抗生物質を手段として, 昭和50年度研究業績報告集, 藤原記念財団, p. 45 昭51

竹尾漢治：肺アスペルギルス症発症機構の Freeze-etching 法による超顕微形態的解明, 昭和50年度科学研究費奨励研究(A) 実績報告書 昭51

Takeo K., Shigeta M. and Takagi Y.. Plasma membrane ultra-structural differences between the exponential and stationary phases of *Saccharomyces cerevisiae* as revealed by freeze-etching. J. Gen. Microbiol. 97: 321, 1976.

Takeo K.. Ultrastructural features underlying the hexagonal arrangement of plasma membrane-intercalated particles of *Saccharomyces cerevisiae*. J. Gen. Microbiol. 97:331 1976.

2. 免疫学に関する研究

桂は、抗体産生と遅延型過敏症 (DHT) を同一の抗原を用いて解析し、抗体産生のヘルパー機能を担う T 細胞と DTH に関与する T 細胞とが別々の細胞であることを示した。これらの結果は4編の論文にまとめられ、1977年初頭の Int. Arch. Allergy. および Immunology にそれぞれ2編ずつ掲載される予定である。DTH に関与する T 細胞の動態をさらに詳しく解析することを目的として、湊 (内科第Ⅱ部門) と共に、T 細胞を単一細胞レベルで検出できる可能性のある唯一の方法である virus plaque 法をヒツジ赤血球 (SRBC) に対する反応に応用することに成功した。マウスを SRBC で免疫すると、脾臓中に SRBC 特異的 virus replicating T-cell が出現することが観察され、virus plaque 法は、最初 Bloom らによって示されたようにツベルクリンというやや特殊な抗原に対する免疫応答のみならず、われわれが普通に実験に用いる抗原に対する応答を解析する手段として用

い得ることが明らかとなった。免疫後の virus replicating cell の出現を、DTH あるいは抗体産生の出現と対比させつつ解析した結果、この細胞は最初考えられていたような DTH の effector cell ではないという結論に達した。免疫応答の調節に関与している細胞である可能性が最も高いが、調節に関与している細胞として従来よく知られている suppressor 細胞と同一のものであるかどうか検討中である。この仕事の第一報は1977年初頭の J. Exp. Med. に掲載される予定である。

西川(内科第二部門)と共に行なっている抗体産生に関する免疫記憶の仕事は、現在 *in vitro* culture 法で解析を進めている。われわれが抗原として用いているウシ血清アルブミン (BSA) は、最も免疫原性の弱い抗原の一つとして知られているが、その理由は、この種の抗原は分子自体に内在する非特異的刺激性 (intrinsic adjuvanticity) が非常に弱いからであると考えられている。したがって、BSA などを用いて *in vitro* で抗体産生の研究を行なうことは困難であると考えられていた。われわれは、化学修飾した BSA を抗原とし、さらに培養中にアジュバントを加えることにより抗 BSA 抗体産生を *in vitro* で行なわせることに成功し、免疫記憶の解析のみならず、アジュバントの役割も *in vitro* で解析することができるようになった。

そのほか、和田(外科部門)と共に抗体産生の調節機構を、また高橋(医学部皮膚科)と共に接触過敏症と抗体産生に関与する T 細胞の分化に関する仕事を行なっている。

〔学 会 発 表〕

桂 義元、湊 長博、泉 孝英：Virus plaque 法による遅延型過敏症の解析，昭和50年度日米医学協力計画結核専門部会 (51.2)

桂 義元：免疫応答の調節とウイルス感染 講演，於国立家畜衛生試験場 (51.6)

桂 義元、湊 長博：細胞性免疫における抗原特異的 virus-replicating cell の役割 峨々嶺セミナー (51.7)

Katsura, Y., Minato, N., Izumi, T.: Antigen reactive lymphocytes detected by virus plaque assay: Suppressor T-cells involved in delayed-type hypersensitivity. Eleventh Joint Meeting Tuberculosis Panel (51.9).

Katsura, Y.: Delayed type hypersensitivity and antibody response to bovine serum albumin in mice, Seminar at the Scripps Clinic and Research Foundation La Jolla, California. (51.9).

Katsura, Y.: Virus-replicating cells involved in the immune response of mice, Seminar at the Department of Zoology, University College, London. (51.10).

湊 長博、桂 義元：ウイルスの遅延型アレルギー発現に対する影響，第37回実験結核研究会総会 (51.12)

西川伸一、高沖宗夫、泉 孝英、桂 義元：たんぱく抗原に対する免疫記憶の研究，*in vitro* での解析，第6回日本免疫学会総会 (51.12)

高橋千恵、太藤重夫、西川伸一、桂 義元、泉 孝英：BDFB 塗布による DNP 特異性抗体の産生機構——接触過敏症との関連について，第6回日本免疫学会総会 (51.12)

湊 長博、桂 義元：マウスのヒツジ赤血球に対する免疫反応におけるウイルス感受性の抗原特異的 T 細胞，第6回日本免疫学会総会 (51.12)

桂 義元、湊 長博、和田洋己、甲野雄次：Vesicular stomatitis virus による遅延型過敏症の増強，第6回日本免疫学会総会 (51.12)

〔誌 上 発 表〕

桂 義元、湊 長博、泉孝英：Virus plaque 法による遅延型過敏症の解析，昭和50年度日米医学協力計画報告書(結核専門部会) p. 287.

Katsura, Y., Minato, N.: Detection of tuberculin reactive cells with virus plaque assay. Japan. J. Tubercul. Chest Dis., 20:5, 1976.

湊 長博、桂 義元：V-PFC 法による抗原反応性 T 細胞の検出，医学のあゆみ 96: 692, 1976.

桂 義元：実験的カンジダ症と免疫——結核菌による抵抗力増強の免疫細胞学的解析，真菌と真菌症，17: 80, 1976.

臨床肺生理学部および放射線科

昭和51年度の当部門（放射線科をふくむ）の研究業績は次のように分類しうる。すなわち、

1. 肺循環の臨床的研究
2. 実験的間質性肺臓炎の研究
3. 呼吸不全の臨床的研究
4. 肺機能の臨床的研究
5. 虚血性心疾患の臨床的研究

これらのうち、1—4 は第16回日本胸部疾患学会における特別講、第29回日本胸部外科学会におけるシンポジウム、厚生省特定疾患（原発性肺高血圧）調査研究班年次総会でそれぞれその成果を発表しえた。5. の分野はこれからの放射線科のテーマとして、さらにその研究をすすめていきたいと考えている。

研究所内での研究活動は、種々の物理的制約をうけざるをえない。この点、関連病院からうけている研究上の患患ははかりしれないものがある。誌上で関係各位に厚く感謝するとともに、今後の協同研究体制のより一層の強化をお願いする次第である。（佐川弥之助）

〔学 会 発 表〕

岡田英彦、倉田昌彦、本田 稔、麻田邦夫、室本 仁：高令者（70才以上）肺癌手術例の経験、第24回肺癌学会関西支部会（大阪）（51.2）

松原義人、滝 俊彦、福田治男、甲斐隆義、船津武志、池田貞雄、長瀬千秋：多剤併用化学療法による肺癌の長期生存例、京大胸部研講演会シンポジウム（51.2）

滝 俊彦、福田治男、松原義人、甲斐隆義、池田貞雄、船津武志、他3名：6才の小児にみられた気管支腺腔、京大胸部研講演会シンポジウム（51.2）

久野健志：パネルディスカッションⅠ“大気中環境因子と疾患”肺（呼吸）機能検査の立場から、第19回臨床病理学会近畿支部総会（51.4）

加藤幹夫：胸部外科における機能的診断と病態生理、第Ⅱ回日本胸部外科学会卒後教育セミナー（51.4）

浅井信明、千葉幸夫、平田正名、伴敏彦：胸腹を用い食道穿孔を修復し得た治験、胸部外科関西地方会（51.6）

浅井信明、千葉幸夫、平田正名、伴 敏彦：特発性自然気胸に対する胸腔鏡下気腫性肺嚢胞切除術の適応、胸部外科九州地方会（51.6）

二ツ矢義一、滝 俊彦、福田治男、松原義人、池田貞雄、甲斐隆義、船津武志：自然気胸に対する外科的治療——Parietal pleurectomy の併用について、第19回日本胸部外科学会関西地方会（51.6）

滝 俊彦、福田治男、松原義人、甲斐隆義、池田貞雄、船津武志：両側性気管支拡張症の外科的治療、第16回日本胸部疾患学会総会（51.6）

長瀬千秋、松本守海、清水慶彦、安倍隆二、伊藤元彦、山本博昭、寺松 孝、滝 俊彦、福田治男、松原義人、甲斐隆義、船津武志、池田貞雄：自然気胸の成因について——病理組織学的観点から——、第16回日本胸部疾患学会総会（51.6）

山田久和、坪井裕志、佐藤公彦、藤田正憲、加藤幹夫、佐川弥之助：Closing volume と Transpulmonary pressure とに関する実験的研究、第16回日本胸部疾患学会総会（51.6）

山田久和、坪井裕志、佐藤公彦、藤田正憲、加藤幹夫、佐川弥之助：肺水腫の進展と closing volume の変動に関する実験的研究、第16回日本胸部疾患学会総会（51.6）

佐川弥之助：特別講演、循環障害による肺疾患（所謂 ARDS および Hepatogenic cyanosis を中心として）、第16回日本胸部疾患学会総会（51.6）

千葉幸夫、伴 敏彦、浅井信明、平田正名、安永敏美：肺動脈再建を起したフェロー四徴症の2例、胸部外科関西地方会（51.6）

千葉幸夫, 伴 敏彦, 浅井信明, 平田正名, 安永敏美: 心室中隔欠損肺動脈狭窄をともなった修正大血管転位症の1治験例, 胸部外科関西地方会 (51.6)

加来省三, 伴 敏彦, 浅井信明, 千葉幸夫, 安永敏美: ダウン症候群と先天性心臓病について, 循環学会九州地方会 (51.7)

平田正名, 伴 敏彦, 浅井信明, 千葉幸夫: 右鎖骨下動脈肺動脈起始をともなった完全大血管転位症2群の1治験例, 循環学会九州地方会 (51.7)

伴 敏彦, 浅井信明, 平田正名, 千葉幸夫, 安永敏美: 虚血性心疾患に対する外科治療の経験, 循環学会九州地方会 (51.7)

安永敏美, 伴 敏彦, 浅井信明, 平田正名, 千葉幸夫, : Annuloaortic ectasia に対する Bentall 手術の経験, 循環学会九州地方会 (51.7)

千葉幸夫, 伴 敏彦, 浅井信明, 平田正名, 安永敏美: 心嚢内 Seronic cyst を合併した完全型心内膜症欠損症の1手術治験例, 九州地方会 (51.7)

伴 敏彦, 浅井信明, 平田正名, 千葉幸夫, 安永敏美: 冠動脈疾患に対する外科治療の経験, 九州地方会 (51.7)

千葉幸夫, 伴 敏彦, 浅井信明, 平田正名, 安永敏夫: ハンコックコンディを用いて右室肺動脈ジャンピングを起った2例, 九州地方会 (51.7)

麻田邦夫, 倉田昌彦, 岡田英彦, 室本 仁, 木村 芳, 古本 勝, 和田泰三, 磯貝興久, 本田裕宏: 腎癌の転移性肺腫瘍の検討, 第25回肺癌学会関西支部会 (大阪) (51.7)

古本 勝, 八幡三喜男, 西谷 裕, 室本 仁, 本田裕宏: 甲状腺癌と副腎癌の複視例, 第89回内科近畿地方会 (51.7)

弘野慶次郎, 市谷迪雄, 北野司久, 宮林美福: 肺線維症の1例, 第25回肺癌学会関西支部会 (51.7)

浅井信明, 千葉幸夫, 平田正名, 伴 敏彦: シンポジウム「組織型別よりみた肺癌の予后」, 縦隔転移よりみた肺癌の組織型別予后, 肺癌学会九州地方会 (51.7)

二宮和子, 滝 俊彦, 福田治男, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄: 高 Ca 血症を伴った肺癌の1例, 第25回肺癌学会関西支部会シンポジウム (51.7)

加藤幹夫: 血液ガス, 第16回臨床肺機能講習会 (51.8)

佐川弥之助: 肺循環, 第16回臨床肺機能講習会 (51.8)

加藤幹夫: 酸塩基平衡, 第16回臨床肺機能講習会 (51.8)

佐川弥之助: 循環障害による肺疾患, 短波放送 (51.8)

浅井信明, 佐藤公彦, 李 泰興, 加藤幹夫, 佐川弥之助, 平田正名, 千葉幸夫, 伴 敏彦, 高山幸男, 延吉正清: シンポジウム, 「肺外科と心臓機能」, 高令者に対する肺外科と心臓機能, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.9)

太田和夫, 渡辺秀男, 加藤 実, 小野村敏信, 加藤幹夫, 佐川弥之助: 側彎を持った81症例の肺機能, 特発性側彎症の発症と進行に關しての考察, 第29回胸部外科学会 (51.9)

平田正名, 伴 敏彦, 浅井信明, 千葉幸夫, 安永敏夫: 開心術後に対する低心拍出量症候群の研究——特に心拍出量と血液ガス動態の關係について——, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.9)

竹田俊男, 佐藤公彦, 佐川弥之助: コラーゲンの生理的成熟に及ぼす性ホルモンの影響, とくに Adldehyde 量と Lysyleoxydase 活性との相関について, 第8回 FDL シンポジウム (51.9)

甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄, 桑原正喜, 滝俊彦, 松原義人: 自然気胸及び開胸術後における胸腔内圧測定の意義, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.9)

池田貞雄, 甲斐隆義, 船津武志, 桑原正喜, 滝俊彦, 松原義人: 胸部 prosthesis としての乾燥硬膜の応用——とくに膿胸の治療, 第29回日本胸部外科学会総会 (51.9)

浅井信明, 千葉幸夫, 平田正名, 伴 敏彦: 胸部外傷2, 3の問題, 関西医科大学胸部外科20周年記念講演会 (51.10)

池上佳典, 飯塚満男, 室本 仁, 倉田昌彦, 岡田英彦, 麻田邦夫, 本田裕宏: 肺癌にみられた重複癌の3症例, 第17回日本肺癌学会総会 (東京) (51.10)

桑原正喜, 池田貞雄, 松原義人, 滝 俊彦, 船津武志, 甲斐隆義: 肺癌に対する心嚢合併切除後の硬膜による欠損部の修復, 第120回近畿外科学会 (51.11)

二ツ矢義一, 滝俊彦, 桑原正喜, 松原義人, 船津武志, 甲斐隆義, 池田貞雄: Ramel 針による胸膜生検 20 例の検討, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

二宮和子, 桑原正喜, 滝 俊彦, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄: 胸膜サルコイドーシスの 1 例, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

滝 俊彦, 桑原正喜, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄, 松原義人: リウマチ性肺疾患の 2 例, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

宮本茂充, 滝 俊彦, 桑原正喜, 松原義人, 甲斐隆義, 船津武志, 池田貞雄: 食道平滑筋腫の 1 例, 第 120 回近畿外科学会 (51.11)

加藤達治, 藤田正憲, 加藤幹夫, 佐川弥之助: 肺胞上皮癌と珪肺とを合併した汎発性鞏皮症 (PSS) の 1 例, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

大井元晴, 佐川弥之助: flow-volume loops について, 第 2 回中国九州地方肺機能研究会 (51.11)

佐川弥之助: 慢性閉塞性肺疾患, 奈良県呼吸器疾患研究会 (51.11)

森本英夫, 倉田昌彦, 岡田英彦, 森川茂宏, 室本 仁: 腹部透視中に発見し, 胸腔鏡で診断した肺過誤腫の 2 例, 第42回日本結核病学会, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (京都) (51.11)

木村 芳, 室本 仁: 肺癌に対する 5FUDS の使用経験, 第 5 回制癌剤臨床研究会 (51.11)

弘野慶次郎, 市谷迪雄, 北野司久, 宮林美福: 気管支性嚢腫の 4 例, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

轟 文夫, 久野健志, 中川正清: Casamenial Pneumothorax (自発性気胸) の 1 例, 第12回日本胸部疾患学会近畿地方会 (51.11)

〔誌 上 発 表〕

佐川弥之助: 近畿地区における第一次疫学調査, 厚生省特定疾患 (原発性肺高血圧症調査研究班) 昭和50年度研究業績 1976.

佐藤公彦, 李 泰興, 林 隆義, 佐川弥之助: 3-Methylindole の肺血管系に及ぼす影響 厚生省特定疾患 (原発性肺高血圧症調査研究班) 昭和50年度研究業績 1976.

佐川弥之助: 循環障害による肺疾患 (所謂 ARDS および Hepatogenic cyanosis を中心として), 日本胸部疾患学会雑誌, 14: 549, 1976.

大井元晴, 佐川弥之助: 老年者の新しい臨床検査, 老年者の臨床検査と正常値についての考え方, 呼吸不全, Geriatric Medicine, 14: 1504, 1976.

大井元晴, 佐川弥之助: 原発性肺高血圧症の分類と診断の基準, 現代医療 8: 175, 1976.

千葉幸夫, 平田正名, 伴敏彦, 浅井信明: 動脈管開をともなった右肺動脈の上行大動脈起始症の 1 治験例 心臓 8: 641, 1976.

石川嘉一郎, 中尾訓久, 浅井信明: 閉塞性凝血性大動脈症 (いわゆる高安病) における肺循環 Circulation & vessel 7: 603, 1976.

Ohta, K., Kato, M., Sagawa, Y.: Pulmonary function disturbance in thoracic deformity with special reference to idiopathic scoliosis (abstract): Jap. J. tbc & chest diseases 20: 77, 1976.

Ohat, K., Watanabe, H., Onomura, T., Kato, M., Sagawa, Y.: Pulmonary function Disturbans in Thoracic Peformity with Special Réference to idiopathic Seoliosis, Postcongress of Fifth Western Pacific orthspedie Asso- ciation conngress.

長石忠三, 池田貞雄, 船津武志, 甲斐隆義, 人見滋樹: 胸部の異常陰影, 改定 2 版, 金芳堂, 1976.

甲斐隆義: 縦隔鏡検査, 日本気管食道科学会会報 27, 1976.